
霧乃宮一族の滅亡

矢岳秀斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧乃宮一族の滅亡

【Nコード】

N9819Q

【作者名】

矢岳秀斗

【あらすじ】

春嵐の夜、母は壮絶な最期を遂げました。布団に撒き散らした鮮血は、まるで地に落ちた紅椿。しかし、母の怨念はこれで終わりませんでした。

没落の旧家、霧乃宮家に隠された秘密は何なのか。それを知ったとき、血塗られた家系はついに終焉を迎えたのです。※2011/07/09 一部加筆・修正。

第一話 霧乃宮紗江子の死（前書き）

第6回『幽』怪談文学賞 長編部門応募作

第一話 霧乃宮紗江子の死

やさしい母でした。

うららかな春のそよ風のように、その顔にはいつも柔らかな微笑みを浮かべていました。

着物を着て庭の桜の木の下に立つその姿は、まるで一幅の絵画のように美しく、私たち子供にとっても自慢の母でした。

江戸時代より薬問屋として栄えた名家、霧乃宮の末裔。大正の御代^よとなった今ではすっかり落ちぶれて仕舞いましたが、気高い矜持だけは失わなかったのでしょう。年老いても、その立ち居振る舞いには優雅なもののさえ感じられました。

長らく患っていた肺病のせいで、二年前、ついに床に伏せて仕舞うまで、母はあの古く薄暗い霧乃宮邸で、孤独な毎日を過ごしていたのです。

家を出ていった彰一兄さんへの恨みごとは、たまに訪ねてゆく私にも、玲子姉さんにも漏らすことはありませんでした。思い浮かべる母の顔は、いつも慈愛に満ちた微笑みを浮かべています。本当に、やさしく誇り高い母だったのです。

だから――

だから今、死の間際にある母の姿が、私にはどうしても信じられませんでした。いえ、私だけではありません。姉夫婦の屋敷、矢野邸。――その離室に集まった誰もが、玲子姉さんも、亮平義兄さん^{にい}も、そうして、駆けつけたお医者様までも、その顔に恐怖と驚愕の色を浮かべ、たじろぐように後ずさったのでした。

「こんな……こんなことがあるのですか」

亮平義兄さんが、かすれた声で云いました。布団に横たわる母を指す手が、目に見えて震えています。亮平さんにすがりつくようにしている玲子姉さんの面は、薄暗い洋燈^{ランブ}の下でもわかるほど蒼白で、声も出ないようでした。無理ありません。三日前に吐血して以来、

意識のなかった筈の母は、低い呻き声を上げながら、射抜くような目で私たちを見ているのです。血走った双の眼。白髪は逆立ち、くちびるはめくれ、それはまるで鬼が乗り移ったかのような、恐ろしい怒りの形相でした。

「突然意識が戻るのは、そう不思議なことではない。人間には、まだ説明のつかないことがいくらでもあるからのう。きっと、紗江子さんは何か云い残したいことがあるのではないか？」

傍らで見守る、年老いたお医者様の声は冷静なものでした。しかし、落ち着いた口調とは裏腹に、いちばん驚いていたのはお医者様自身だったのでしよう。もう決して目覚めることはないと自ら診断しながら、死を迎えようとしていた母が、いきなりカッと目を見開いたのですから。肺病特有の壊れた笛の音のような呼吸と、土色にむくれた両の足。死は、すでにそこまで迫っているというのに。

それは、目覚めたというよりは、何かが憑依したと云った方が正しいのかもしれませんが。眉間に皺を寄せ、大きく見開かれた眼。獐猛な鼻と、今にも噛みつかんばかりの口。昔日の面影はどこにもない鬼の形相。——こんな恐ろしい顔をした母を、私たちは見たことありませんでした。

地の底から何かが這い出てくるような獣じみた呻き声は、離室の窓を叩きつける春の夜の嵐と、闇を引き裂く雷光と相まって、今にも姿の見えぬ魔物が現れる前触れのようにです。私は思わず、ごくりと唾を飲み込みました。

本当に、これが母なのでしょいか。あのやさしく、凜とした表情の裏に、今まで鬼の顔を隠していたのでしょいか。私は霧乃宮紗江子の娘として、三十七年もの間まったく気づきませんでした。今まさに命の灯火が消えようとしている瞬間、どういうわけか母はついにその仮面を脱ぎ捨てたのかもしれませんが。

「お母ちゃんが云いたいことって……？」

亮平さんの腕をぎゅっと？んだまま、玲子姉さんが上擦った声で、誰にともなく問いを発しました。

「そこまではわからん」

枕元で見守るお医者様が、答えにならない言葉で返します。

母の心残りが何なのか、私はなんとなく予測もついていた。私たちに一言も愚痴ることはありませんでしたが、それはおそらく、霧乃宮の家に戻ってこない彰一兄さんのことでしょう。二十年前、放蕩にふけていた父がついに帰らなくなると、それを機に、彰一兄さんも母と私を残して家を出てゆきました。カフェで出逢った、女給との駆け落ちでした。

女学校を出た私も、その二年後には結婚し、母は長い間、あのだっ広い霧乃宮邸で、孤独な毎日を送ることになりました。

あれっきり、一度も姿を見せない彰一兄さん。母はきつと、最期に息子に一目会いたいのに違いありません。

私は怖いというよりも気の毒で、母が横たわる病床ににじり寄りました。

「お母ちゃん、何うしたの？ 何か欲しいものがあるの？ —— みんなここにいるよ。お母ちゃんのために、みんな集まったんだよ」私は幼い子供に云い含めるような口調で話しかけました。すると母は、そんな私さえも般若の面のようにつり上がった目で見据えるのです。真っ赤に充血した目の奥には、たしかに憤怒の炎が渦巻いていました。

そうして、あろうことか母はその口から言葉を発したのです。

「……まあだ……ここに来ておらん者が……おる——」

それは、明らかに母のものではない、ひどくしわがれた低い声でした。さすがのお医者様も、思わず小さな悲鳴を上げます。あまりのことに、亮平さんと姉さんは馬鹿みたいに口を開けたまま、声も出ないようでした。二人寄り添い、目の前で起きている恐ろしい事態に震え上がっています。

私は、怖いとは思いませんでした。どんな変貌を遂げようと、ここにいるのはたった一人の母。もう、余命幾許もない私の親なのですから。

「お母ちゃん、みんないるよ。私も、お姉ちゃんも、亮平さんも」
「嘘をつけ！」

母はぴしゃりと云いました。その顔が、さらなる怒りに引き歪みます。

「まだ……みんなそろってはおらん——」

どうしてそんなことがわかるのでしょうか。どうして、私の云うことに答えられるのでしょうか。もう、とつくに目はこの世を映していないはずなのに。耳は轟く雷鳴さえ聞こえていないはずなのに。そうして、死期はすぐそこに迫っているのに。それなのに母は、今にも？みかからんばかりの勢いで吠え立てるのです。本当に、悪い憑きものにも取り憑かれたようでした。

「まだ、誰か来ていない親族がおられるのか？」

少し冷静さを取り戻したのか、お医者様が声を潜めて尋ねました。姉夫婦は互いに見交わし、首を振ります。答えるつもりはないようです。

「実は、長男が——」

私は姉夫婦を気に掛けながら、遠慮がちに口を開きました。

「香奈恵！」

「香奈恵ちゃん——！」

案の定、姉夫婦は血相を変えて異口同音に私を咎めます。私は口を噤み、力なくうなだれました。姉夫婦の前で、彰一兄さんのことは禁句なのです。

それは、仕方のないことかもしれません。家を出た彰一兄さんに代わり、動けなくなった母の面倒を看ていたのは、亮平さんなのですから。年老いた病気の母を、ひとりで放っておけない。といって、姑のいる家に嫁いだ私にもどうすることもできません。私は唯一の寄る辺として、亮平さんを頼ったのでした。

亮平さんは、母を自分の家で看ると云って呉れました。自らの親はいないとはいっても、妻の親を引き取るなんてことはなかなかできることではありません。地元の名士、霧乃宮の者が、孤独な最期

を遂げるなど世間の恥。いえ、母の自尊心だってそれを許さなかったでしょう。本当に、亮平さんには感謝してもしきれません。私たち霧乃宮家の者は、亮平さんに頭が上がりませんのです。

その亮平さんが母を引き取る条件として挙げたのが、彰一兄さんとの関係を絶つことでした。実は、私たち妹には、彰一兄さんは自分の居場所を告げていたのです。それはここからさほど遠くもない場所で、ハイヤーで迎えに行けば、母の死に目に間に合うかも知れません。

しかし、季節の折の手紙のやりとりさえも、この一件があつてからは、亮平さんに禁じられていました。それは、自分勝手に家を飛び出した彰一兄さんに対する報いなのです。母が臨終の間際にあつても、彰一兄さんは呼ばないこと。死に目には会わせないこと。

「どんな事情があるのか知らんが、最期の望みぐらい叶えてあげるのが子の努めではないのか？ このままでは、紗江子さんが気の毒じゃろう」

何となく、事の次第を察したのでしよう。お医者様の口調は、論すようでした。それは云われるまでもありません。私自身が、どれほど口惜しいことでしょう。恩ある母の、最期の願いさえ聞き届けてあげられないなんて！

私はすぎるような思いで、亮平さんを見ました。しかし無情にも、亮平さんは頑として首を縦には振りませんでした。人の死を、母の死を持ってしても許せないことなど何があるのでしょうか。

所詮、これが赤の他人と血のつながった親子の情の違いなのでしょう。でもそんなこと、口が裂けても亮平さんには云えません。孤独な母の看病を引き受けて呉れたのは、他ならぬ他人の亮平さんなのですから。

「——早く、呼べ……あの子を、早くここに呼んで呉れ」

ぞっとする、悪魔めいた声が狭い部屋に木霊します。窓から差し込む稲妻が、暗い離室の中に夜叉のような母の顔を蒼白く浮き立たせました。ひよっとして、母の魂はすでに黄泉への旅路に向かって

いたのかもしれませんが。私たちの目の前にいるのは、老婆の姿をした鬼——悪鬼そのものでした。

私たちは恐れ、戸惑い、絶句するばかりです。

「——おって……」

また、母が何か云っています。

「何？ お母ちゃん」

「謀^{たばか}りおって……おまえらは、よってたかつて儂を謀りおって——」

私は心底驚きました。何を云っているのでしょうか。母は、いったい何を恨んでいるのでしょうか。それはあまりに呪詛の響きに充ち満ちていて、死の間際の意識の混濁の中で発せられた台詞とはどう思いえませんでした。矢張り、母は何かを恨んでいるのです。

「お母ちゃん、何を云ってるの？ 私たちがお母ちゃんを騙すなんて、そんなことするわけじゃないじゃない」

玲子姉さんは遠巻きに、弱々しく云いました。すると母は、さらに眉根を寄せて玲子姉さんを睨^ねめ付けました。

「黙れ」

私たちは戦慄し、動くこともできません。もう、半ば死んでいる老婆に、誰もが逆らえずにいたのです。爛々と狂気の光を放つ眼で、射すくめられたみたいです。さすがの私も、手はじっとりと汗ばみ、背筋に冷たいものを感じました。

「姉さん、お母ちゃんは何のことを云っているの？ 謀るって——」

「そんなこと私が知るわけないでしょう！」

玲子姉さんは半狂乱になり、泣きわめくばかりです。

「亮平さんは？ お母ちゃんの云ってることに、心当たりはないのですか。それとも、矢張り彰一兄さんに会いたいののでしょうか？」

「し、知らん。俺は知らんぞ。恨まれることなど何ひとつない。だいたい、人に世話になっておいて何て云い種だ。彰一君に來られ

たら、俺の立場がないことぐらいわかるだろう。えい、こんなことなら……！」

母など放っておけばよかった——さすがにその一言は娘の私たちの前で云ってはいけないと気づいたらしく、亮平さんは口を噤みました。かれがただの憐れみや義憤に駆られて母を引き取ったわけではないことはわかっていました。

亮平さんはただ——

いえ、今はよしでしょう。どんな理由があれ、母が世話になったことには間違いないのですから。それに、今さら彰一兄さんにこのこ来られては、亮平さんの立場がないことも確かです。生きて彰一兄さんに会えないことは、母も承知の上でしたし。

きっと私たちは親不孝な子供なのでしょう。死の床にある母の、最期の願いさえ叶えてあげられないなんて。窓硝子に激しく叩きつける雨音は、彰一兄さんとの邂逅を果たせぬ母の、慟哭のようでした。

「おまえたち——よくも……」

母の恨みは、よほど根深いのでしょうか。ついに、動かぬはずの体を起こそうとします。私たちは恐怖に怯え、身動きすらできません。まさか、本当に獲って食われるのでしょうか。——しかし、それが母の最期の言葉でした。次の瞬間、母は奇妙な音とともに、大量に吐血したのです。

「お母ちゃん！」

布団に撒き散らした鮮血は、まるで地に落ちた紅椿。肺が溶ける饅えたような甘い匂いは、花瓶の中で腐った切り花と同じ匂いでした。

地獄の花畑と化した布団の上で、母はカッと目を見開いたまま、苦悶の表情で事切れていました。

「ご臨終です」

枯れ木のような手を取り、お医者様は厳かに告げました。それを聞き、私たちは悲しむどころか安堵の息を吐いたのです。

春の夜の嵐は、さらに激しさを増したようでした。

第二話 花冷え

母、紗江子の遺体は、葬儀の為に霧乃宮邸に戻って参りました。

久しぶりに訪れた、私の実家――。塀に囲まれた重厚な日本邸宅は、先代の霧乃宮家第三代当主、霧乃宮藤太郎が建てたものでした。門をくぐると玄関まで飛び石が続き、左右に広がる庭には、松の木やら、椿やらが立ち並んでおります。もう少し春が深まればツツジが咲き誇り、見事な色合いで庭を染めるでしょう。

しかし、そんな自慢の庭も長い間手入れがされておらず、今では枝も伸び放題に伸びています。昨夜の嵐から一転した春晴れもその陽差しを遮られ、広大な屋敷は鬱蒼とした印象を与えるのでした。そのせいか、季節外れの寒さが一層身に浸みます。縁側から見える庭の桜は五分咲きでしょうか。天気は良くとも思わぬ花冷えに、折角咲きかけた花びらはちぢこまってしまったようでした。

玄関をくぐると、家の中は湿気った黴臭い空気が漂っていました。霧乃宮邸は広く、部屋は大小合わせて十二を数えます。かつて葉間屋として栄えていたときには、屋敷の中に幾人もの使用人を住ませ、寝起きを共にしていたのでした。しかし、それも霧乃宮紗江子が養子として迎えた第四代当主、つまりは私の父である竜三に代替わりしたときを境に、商売は立ち行かなくなって仕舞いました。

何のことはありません。父、竜三は突然手に入った莫大な金にたがが外れ、放蕩にふけるようになってしまったのです。

霧乃宮の財産をほとんど食い潰し、挙げ句の果てに出奔してしまつたとき、母はむしろ、ほっとした顔を見せておりました。――大切な家屋だけは失わずに済んだ――と。

女郎に入れ込んで出ていったと聞かされたのは後年のことです。そんなころ、時を同じくして彰一兄さんがカフェの女給と駆け落ちしたというのは皮肉なもので、口さがない近所の人々からは、「親子そろって商才よりも色事に長けている」と、侮蔑を込めて噂され

たのでした。

やがて私も嫁いでゆき、一人残された母が暮らすには、霧乃宮邸はあまりに広すぎました。部屋のひとつは文字通り開かずの間だったようで、家の中の空気は澱みきっています。取り敢えず、雨戸も障子も開け放たねばなりません。私たちは時季はずれの寒さに震えながら、家中の襖を開けて廻りました。そうして仏間に布団を敷き、母の遺体を北枕にして安置します。霧乃宮紗江子逝去のお触れは、すでに廻っていたのでしょう。葬儀の段取りをする「お取り持ち」と呼ばれる近所の方々が、次々と屋敷を訪れていました。

私たちは仏壇に蠟燭を灯し、死臭を隠す為の香を焚くと、あとはもう、することがありません。死者の身内は葬儀に手も口も出さないのが、この地の仕来りでした。

「お婆ちゃん、ねえ、何うして起きて呉れないの？ 由希子が来たんだよ。由希子だよ。ねえ、お婆ちゃん」

物云わぬ骸と化した母に、姪っ子の由希子ちゃんがすがりつきます。

「由希子と遊ぼうよう。お手玉しようよ、お婆ちゃん」

「由希子、やめなさい」

涙まじりに呼びかける由希子ちゃんを、玲子姉さんはそつとなだめました。舌っ足らずな子供のような喋り方ですが、由希子ちゃんはまだもう十九歳です。生まれつきおつむりが弱く、体は大きくとも三、四歳の知恵しかありません。色白でおかっぱの由希子ちゃんは、まるで日本人形のように。しかし切れ長の目は赤ん坊のように無垢そのもので、何となく倒錯めいた感じのする子でした。

そんな由希子ちゃんを、母は不憫だと云っていたいそう可愛がっていたのでした。もちろん由希子ちゃんも懐いていましたし———ですから突然訪れたお婆ちゃんの死を受け入れられないのでしょうか。必死に呼びかける姿は、涙を誘わずにいられません。

しかし、姉さんと亮平さんにとって、由希子ちゃんは尽きることはない悩みの種でした。特に亮平さんは、由希子ちゃんが自分の娘

であることを未だに受け入れられないようで、事あるごとに由希子ちゃんを折檻していると聞きます。亮平さんは鉄鋼の貿易によって一代で財を成した方で、ゆくゆくは養子を迎え、家督を譲るつもりでした。ですが由希子ちゃんが白痴とあっては、それもままなりません。

霧乃宮の末裔である私たち兄妹は、ここに来てなぜか子宝に恵まれませんでした。彰一兄さんのところも子供の話は聞いたことがありますし、私も——結婚して十九年目になる夫、頼長聡太郎子爵との間に、ついに子供はできませんでした。霧乃宮の血縁としては由希子ちゃんは唯一、姉夫婦が授かった子なのです。かつて栄華を極めた霧乃宮家は、その没落と時を同じくして、一族の血さえも途絶えようとしているのです。

「お婆ちゃん、起きてよ、ねえ——」

「やめんか、由希子！」

なおも亡骸にすぎる由希子ちゃんに苛立ちを憶え、亮平さんは彼女の？をぴしりと打ちました。たちまち由希子ちゃんは幼子同然に火がついたように泣き出します。「何うして由希子に限ってこんな子に生まれてきたのだ」とは、未だ亮平さんが口にする繰り返いで、幼少の頃から秀才の名を欲しいままにしてきたかれにとっては、自分の子供がこうであることが耐えられないのでしょうか。亮平さんは良き人でありましたが、娘のことに関する限り、どうにも我慢が効かぬようでした。

「由希子ちゃん、こっちにいらっしやい」

私はそっと自分の胸に由希子ちゃんを抱き寄せました。

「——お婆ちゃんはねえ、もう由希子ちゃんとお話できないの。遠いところに行っちゃうんだよ」

ゆつくりと諭すその言葉は、自分自身に云い聞かせていたのかも知れません。母が亡くなったことを未だ受け入れられないのは私も同じです。

「遠いところ？」

「そう、遠いところ。お星様になるの」

由希子ちゃんは、私の云うことをどれほど理解しているのでしょうか。泣き腫らし、鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、ぼんやりと私を見つめています。

亮平さんは、そんな私たちを忌々しげに見ると、露骨に舌打ちをして立ち上がりました。所詮、義理の親でしかない霧乃宮紗江子の死は、かれにとってはそれほど感ずるところもないようです。私は何だか腹立たしくなり、座したまま亮平さんを睨め付けました。

「香奈恵ちゃん、仏さんの前やから……」

玲子姉さんは困惑気味に、場を取りなそうとします。悪いのは明らかに亮平さんなのに、私の所為だと云わんばかりに。私はそんな姉さんに対しても怒りが湧き起こり、思わず口を開きかけました。しかし、私の怒声は口について出ることはありませんでした。座敷に漂う不穏な空気を打ち消したのは、誰かが玄関を慌ただしく駆け込んでくる物音でした。

私も、亮平さんも、玲子姉さんも、開け放たれた襖の向こうに訝しげな目を向けます。やがてそこに現れた人物を見て、居合わせたみんなが息を吞みました。

「彰一兄さん……」

思わず眩きが漏れました。ひどくげっそりと痩せ細った？、広くなった額と真っ白になった髪。気弱そうな目には涙を浮かべて、それは変わり果てた姿ではあったけれども、霧乃宮彰一——彰一兄さんに間違いありません。

お互い、会おうと思えば会える距離に居たのですが、兄も駆け落ちという後ろめたさがあったのでしょうか。この二十年、一度も姿を見せたことはありませんでした。それにしても長い年月の間、彰一兄さんはどんな人生を歩んできたのでしょうか。確か私より一回り以上も上、すでに五十を過ぎてはいますが、その容姿は更に十も年老いたかのようです。刻まれた皺が苦労の数だとすれば、とても仕合わせな人生を送ってきたとは思えません。

その彰一兄さんは息を切らしながら、呆然と立ち尽くしていました。

「おふくろ——」

横たわる母の骸を凝視したまま、彰一兄さんが力なく呼びかけます。次の瞬間、彰一兄さんはわっと喚いて遺体に駆け寄ろうとしました。

「おふくろ！」

しかし部屋に入ってきた兄の腕を、亮平さんが？んで止めました。

「何しに来た」

泣きすがろうとする兄の前に、血相を変えた亮平さんが立ちはだかります。

「勝手に家を出ておいて、今さら君が霧乃宮家の敷居をまたぐ資格はない。お引き取り願おう」

「ごめんなさい。私が——彰一兄さんには、私が連絡しました！」
私は亮平さんに対しての怒りも忘れ、必死に二人の間に立ち入りました。

「母がいよいよ危ないとなった三日前、禁忌を破って手紙を出したんです。このまま今生の別れとなるのはあまりに忍びなくて。母が可哀想で……ですから——！」

しかし、亮平さんは私の言葉など耳に入らないかのようでした。

「さあ、帰って呉れ。彰一君に居られては、取り仕切っている私の立場もないものでネ」

「お義兄さん！」

私はなおも亮平さんに取りすがろうと、その黒袖を？みます。

亮平さんの言い分も解ります。矢野家の者が、矢野亮平が霧乃宮家の葬儀を取り仕切るのは、跡取りがいないからこそ。長女の夫としての義務であることが建前です。家を出ていったとはいえ、長男である彰一兄さんに出てこられては、亮平さんの立場がありません。ただ、私はそれすらも建前であることを知っていました。亮平さんの本当の狙いは、霧乃宮の財産、霧乃宮家を我がものとするこ

なのです。放蕩三昧の父の所為でお金はありませんが、この帝都の
一等地に構える百数十坪の土地と屋敷、更には先代が集めた骨董を
含めれば、優に一財産はあるのです。病気の母を引き取ったのも、
そんな計算があったからに違いありません。

しかしそれも、彰一兄さんが出てきたとあれば、話は簡単に進ま
なくなつて仕舞います。亮平さんは、どうにかして兄を追い返そう
と、躍起になっていました。

「お義母様だって、君みたいな親不孝者の顔など見たくないだろ
うからネ。もう、ここには来ないで呉れないか」

「申し訳ありません」

泣きじゃくりながら、彰一兄さんは地に頭をこすりつけ、土下座
しました。

「許してもらえないことは解っています。しかし、どうか焼香だ
けでも。——いえ、片隅に座らせていただくだけで構いません。最
期に母を見送らせて下さい。どうか、どうかお願い致します！」

「お義兄さん、私からもお願いします。母だって、彰一兄さんに
会いたかったに違いありません。何があろうと、矢張り親子なので
すから」

私も兄と並んで土下座し、必死に懇願しました。いくら広い屋敷
と云えど、すべての襖を開け放した家の中で、声は筒抜けです。騒
ぎを聞きつけ、数人のお取り持ちがいったい何事かとのぞき込んで
いました。心配してと云うよりは好奇の目です。亮平さんは頑とし
て譲らぬ構えでしたが、それを見ると苦い表情になり、「勝手にし
ろ」と云い捨てて部屋を出てゆきました。

？然とする人々の間に、白けた空気が漂います。

「すみません。お騒がせしまして。何でもございませんので、ど
うか心配なさらずに」

私は努めて明るく云い、もう屋敷の風通しは終わったと云わんば
かりに、襖や障子を閉めて廻りました。久々に顔を会わせた霧乃宮
一族には、まだまだ波乱が起きそうでした。

仏間に戻ると、彰一兄さんは正座したまま嗚咽をもらしてしました。手紙を見て、慌てて出てきたのでしょうか。死に目には間に合うと思っただのか、黒の喪服ではなく緋の着物を身につけています。玲子姉さんは、二十年ぶりに再会した兄にどう声を掛けていいのか解らないようで、居心地が悪そうに俯いたままでした。由希子ちゃんはその成り行きがまったく理解できず、鼻歌交じりに縁側に座っています。

「兄さん。お母ちゃんの顔、見る？」

彰一兄さんがこの二十年間どうしていたのか、私はあえて聞きませんでした。それはあとでじっくり話せばいいことですし、折角駆けつけて呉れた兄をこれ以上追い詰めたくなかったのです。

彰一兄さんは私の言葉に頷くと、顔に白い布がかぶせられた母の亡骸に近づきました。少し長い合掌のあと、ゆっくりと布をめくります。

「ひっ……！」

その死に顔を見て、彰一兄さんは悲鳴と共に思わずのけぞりました。噛みつかんばかりに開かれた口腔。障子紙を丸めたように白く、皺の刻まれた顔。見開かれた眼は、憤怒を宿したまま天井を見えます。それは、母が死に際に見せた苦悶の形相を呈したままでした。

「……」

あまりのおぞましさに、彰一兄さんは絶句したまま唇をわなわなと震わせていました。

「お母ちゃん、最期はずいぶん苦しんだんや」

私はそうとだけ云いました。母の最期を、彰一兄さんに詳しく語る気はありません。鬼が乗り移ったような形相でこの世を、彰一兄さんを恨んで死んでいったと知れば、兄は未来永劫、罪の意識に苛まれるでしょう。彰一兄さんはそっと白布を戻すと、声を上げて号泣しました。

「おふくろ……堪忍して呉れ——堪忍……」

彰一兄さんは、それだけ云うのが精一杯のようでした。それは悲しみと共に、親の死に目にも会えないような人生を歩んで仕舞った自らを悔いる涙でもあったのでしょう。私は居たたまれない気持ちになって、もらい泣きしながら目をそらしました。こんな兄の姿を見ていられなかったのです。

私が幼い頃、まだ祖父の藤太郎が健在だった頃は、仕合わせな家でした。私たち兄妹も仲が良く、特に彰一兄さんには可愛がってもらった記憶があります。長い紆余曲折の果てにこのような再会を果たすなど、あるとき誰が想像したでしょう。季節の折りに咲き誇る霧乃宮邸の庭の花は、その記憶さえも極彩色に彩っていたのに。今年の桜は、深い悲しみと共に墨染の花を咲かせるのでしょうか。私は涙を拭いながら、縁側に目を向けました。

昼下がりの、やわらかい春の陽差し――。堅い蕾が開きかけた桜の木の下に、誰かがしゃがんでいます。白い着物を着ていますが、後ろ姿からは誰なのかわかりません。いったい誰なのでしょう？ 私は訝しみ、首を傾げました。縁側に腰掛けていた由希子ちゃんはその方を指さします。

「お婆ちゃん！」

嬉しそうに駆け寄っていく由希子ちゃん。そんな筈はありません。母はここに、永遠の眠りについているのですから。私はぞっとしながら、その光景を呆然と眺めていました。

白い着物の人物は立ち上がり、こちらを振り向こうとします。誰なのでしょう。見てはいけないような気がします。しかしその瞬間、かれ――或いは彼女――の姿は、忽然と掻き消えました。

「あ――」

驚愕の声は、私と由希子ちゃんの口から異口同音に発したものでした。？然として立ち尽くす由希子ちゃんの上に、一片の花びらがひらりと舞います。花冷えの帝都は、さらに冷え込んできたようでした。

第三話 桜の下に棲まう鬼

私は吃驚^{びっくり}して、縁側に駆け寄りました。右も、左も、誰かが潜んでいるのではと庭を見渡しますが、桜の下はもちろん、ツツジの茂みにも灯籠の影にも、矢張り誰もいません。帝都に吹きつける冷たい風だけが、私を嘲笑うかのように？を撫でます。思わず身震いしたのは、その寒さの所為だったのでしょうか。私はなおもぼんやりと口を開いたまま、立ち尽くしていました。今のは何だったのでしょうか。桜の木の下に現れた人影。しかし、それは一陣の風に吹き飛ばされたとても云うように、忽然と掻き消えたのです。

「ねえ、お婆ちゃんは？ どこに行ったの？」

由希子ちゃんも不思議そうに辺りを見回しながら尋ねます。

「お婆ちゃん——だったのかな？」

私は？が引きつるのを感じながら無理矢理笑みを浮かべ、由希子ちゃんに聞きました。

「わかんない。でも、きつとお婆ちゃんだよ。あたしを見て笑ったもん」

そう云って、由希子ちゃんは屈託のない笑顔を見せます。それじゃあ、由希子ちゃんは白い着物の人の顔を見たのでしょうか。そうして、それは母だったのでしょうか。遺体は仏間で眠りについていてというのに、魂は成仏しきれず屋敷を彷徨っているのでしょうか。それは自分の親と云えど、何となくぞっとするものがあります。

「お婆ちゃん、どこ行ったのかな」

死を理解していない由希子ちゃんは、まるで隠れん坊でもしているかのように無邪気に亡霊を捜しています。どこに行ってしまったのかは解りません。私が聞きたいくらいです。でも、由希子ちゃんも見たと云うことは、あれはただの幻惑ではないのでしょうか。

「香奈恵ちゃん、どうかしたの？」

玲子姉さんがそばに来て、怪訝そうな顔をしました。

「今、確かに誰かがここに立っていたんだけど……」

「この庭に？」

眉根を寄せ、玲子姉さんも探るように辺りを見回します。

「誰も居ないじゃない」

「ええ、でも——」

「見間違いないじゃないの？　きっと光の加減か何か。硝子に反射した太陽の所為でそう見えただけではなくて？　それより、もうそろそろ縁側の戸も閉めて頂戴。寒くて仕方ないわ」

玲子姉さんは決めつけると、もうそれには興味をなくして奥の座敷へと戻ってゆきました。由希子ちゃん是他のことに気を取られてか、それとも本当にお婆ちゃんを捜すつもりなのか、気がつくところかに行って仕舞ったようです。私は云われたとおり障子戸を閉めながら、もう一度だけ桜の木を眺めました。確かに、姉さんの云うとおり見間違いだったのかもしれませんが。本当に、光の加減か何か——。

私も、由希子ちゃんも、それが白い着物を着た人に見えたのでしよう。私は納得しないながらも、自分に云い聞かせることにしました。云い聞かせながら思い出したのは、幼い頃に母が語って呉れたあるお話です。

——桜の下には、鬼が棲まうんじゃ。

その鬼は、蒼白い顔をして庭の桜の木の下に立っているのだそうです。

——家に死人が出そうになると決まって現れる。抜け出た魂を喰らおうと、じっとこっちを窺っておるんじゃよ。

私と由希子ちゃんが見たのは、母の魂を獲って喰おうとする鬼だったのかもしれませんが。

私はこの出来事が妙に気になっていましたが、やがて日暮れ前にお寺の住職が到着し、通夜の段取りを話し合う頃になると、もうそれどころではありませんでした。

線香の煙る座敷の中で、慌ただしく色々なことが決められていき

ます。そんな時、亮平さんの発した言葉に私は驚き、継いで怒りが込み上げてきました。何と亮平さんは、霧乃宮紗江子の葬儀に喪主を立てないと云うのです。

「生憎、霧乃宮の家を継ぐ者は誰もおりませんので。務める者がおらんのですよ」

その言葉に住職も腕を組んだまま、渋い表情で考え込みました。

「どうしても喪主は立てないと云われるのか」

「ええ」

「しかし、そんな葬儀は聞いたことがない。身寄りのない無縁仏ではあるまいし、霧乃宮家ともあろう方が喪主を立てないなど、世間体というものがあるでしょうに」

「いや、私の妻も今は矢野家の者ですし、香奈恵さんも頼長の家に嫁いでおります。霧乃宮家の人間は、もう誰もおりませんので」

「彰一兄さんがいます!」

私は思わず口を挟みました。

「彰一兄さんは霧乃宮家の長男です。兄さんではどうしていけないのですか? —— というより、彰一兄さんが喪主を務めるのが筋ではありませんか!」

亮平さんは鼻を鳴らし、憤る私と、そうして部屋の片隅で縮こまっている彰一兄さんをじろりと一瞥しました。その目には、まるで虫けらでも見るような冷酷な光を宿しています。

「親を捨てて勝手に出ていった癖に、こんな時だけ我が物顔をされてもな。いくら霧乃宮の姓を名乗っているとはいえ、彰一君は自ら縁を切ったのではないか? 見捨てられた息子に喪主を務められでは、お義母様だって浮かばれんと思うが」

亮平さんはつけつけと云いました。

「そんなこと——」

「香奈恵、いいんだよ」

なおも云い返そうとする私の裾を引っ張り、彰一兄さんは止めに入りました。

「亮平さんの云うとおりだ。俺には喪主を務める資格はない」

「兄さん！」

自嘲めいて唇の端を引きつらせ、力なくうなだれる彰一兄さん。私は助けを求め、正面に座る玲子姉さんを見据えました。

「姉さん、何とか云ってよ。お母ちゃんの葬儀がこんなことではないの？」

玲子姉さんは気まずそうに私から目をそらし、旦那である亮平さんをちらり、ちらりと見ながら、云いにくそうに口を開きました。

「そうねえ……でも、矢っ張り、家を出ていった彰一兄さんが喪主というのもおかしい話だし——」

「何うして実の息子が喪主を務めるのがおかしい話なの！」

玲子姉さんにとっては、夫の亮平さんの機嫌を損ねることの方がずっと罪悪なのでしょう。そんな姉さんにも腹が立ち、私はつい、声を荒げて仕舞いました。気がつくと、閉じた襖の向こうで、集まったお取り持ちの方々が耳をそばだてている気配があります。お家騒動は、かれらにとって蜜の味。舌なめずりをしながら聞き入っている筈です。仕方なく、私は声を潜め、小さく毒づくことしかできません。

「お母ちゃんが浮かばれないわ」

しかし、私は結局、亮平さんの決定には逆らえませんでした。亮平さんにとって、これは霧乃宮家を手中にする為の大きな布石だったに違いありません。喪主を立てない——つまりは、霧乃宮家の者はもう誰も居ないと、世間に明言したのです。

こうして、霧乃宮紗江子の通夜が始まりました。参列者の少ない、侘びしい通夜でした。襖を取り払った六畳二間の仏前に座っていたのは、私たち親族を含めても十二、三人でしょうか。二十二年前、祖父、藤太郎の亡くなったときは、ひっきりなしに弔問客が訪れていました。中には財界で名を馳せるような大会社の社長様やら、地元の代議士の先生やらもおりまして、その顔ぶれはまさしく「綺羅、

星の如く」でしたのに。母、紗江子の葬儀は、霧乃宮家の没落をまざまざと見せ付けられたようでした。

母の死を本当に悼んでいる者は、さらに少ないでしょう。亮平さんは云うに及ばず、玲子姉さんもほとほと看病に疲れ果てていた所為か、打ちひしがれている様子はありません。その中で、もつとも悲しんでいたのは矢張り彰一兄さんでしょうか。読経の間、じつと仏壇の奥を見つめて、いったい何を思っていたのでしょうか。憔悴しきった表情からは、悲しみよりも後悔の念の方が深いような気がします。死の間際、恨み言を並べた母ですが、今の彰一兄さんを見たら何と声を掛けるのでしょうか。なんだから、母の御霊はまだこの座敷に居るような、そんな気がします。

部屋に漂う乾いた腐臭。肉の臭いを含んだ焼香の煙は、やがて彰一兄さんの座る部屋の片隅に部屋に流れてゆきます。それはまるで、母がようやく会えた彰一兄さんを慈しんでいるようで、かれの体を包み込むように渦巻いていました。揺れる蠟燭の炎は、邂逅を果たした歓喜の震えでしょうか。風のない部屋であんなにも火が揺らめくのは、まったくおかしい事でした。

そして、かすかに聞こえる子供のようないき高い笑い声。母のものではありません。母は、こんな下品な笑い方をしないのですから。ひょっとして、昼下がりに見た白い着物の鬼が嘲笑っているのでしょうか。その障子を開ければ、夜桜の下には蒼白い顔をした鬼が立っているのかもしれない。縁側の方からは先ほどからずっと視線を感じていますが、私は怖くてそちらを見ることができませんでした。まるで詠々と読み上げられる経文が、亡霊を呼び寄せているようです。

何となく嫌な胸騒ぎのする、落ち着かない通夜でした。息苦しくて、目眩がしそうです。母の通夜だと云うのに、私は悲しみに暮れるどころか早く終わって欲しいとさえ念じていました。良からぬ予感がするのは、私だけででしょうか。ちらりと周りを窺いますが、みな神妙な面持ちでうなだれ、意味の解らない念仏に聞き入っていま

した。喪服姿が並ぶ沈痛なその光景は、並ぶ参列者さえ死んでいるみたいです。まるで座したまま息絶えた即神仏のように。

反対に、仏壇の前で眠る母は、今にも起きてきそうです。死に装束から伸びる干涸らびた手足。白い布が掛けられた顔は、まだ苦悶の表情を残したままなのです。母に死の安らぎは訪れていないようでした。未練を残した母の怨念が屋敷に漂い、私を落ち着かない気持ちにさせるのかもしれませんが。

永劫とも思える長い時間の果てにようやく通夜が終わったとき、私は呪縛が解けたようにほっと胸を撫で下ろしたのでした。

わずかばかりの参列者は、明日の葬式の来訪を約束し、帰ってゆきました。そうすると、ただっ広い霧乃宮邸には、私たち親族だけが残りました。今夜は仏の御守りをするために、一晩中母の遺骸と過ごさねばなりません。線香と蠟燭の火を、絶やしてはいけません。

「亮平さんと姉さんは帰って休んでください。今夜は私と彰一兄さんがここに泊まりますので。――兄さん、それでいいでしょう？」

私は勝手に決めつけ、兄を見やりました。

「ああ、もちろん。姉さんと亮平義兄さんにはお世話になりっぱなしだし、これぐらいことはお役に立たないと」

「そうかい。まあ、そうして呉れると助かるネ」

亮平さんはそう云って、おだてられて喜んでいるときの癖である鼻の穴をひくひくさせながら、満面の笑みを浮かべました。

「久しぶりに彰一兄さんと話したいこともあるけれど、まだ明日があるのだし、今日のところはお暇させていただわくわね」

玲子姉さんも、亮平さんに続いて立ち上がります。確かに姉さんも帰ってくださいとは云いましたが、玲子姉さんは居て呉れても良かったのではないのでしょうか。亮平さんはともかく、姉さんは霧乃宮紗江子の実の娘なのですし。

しかし私は云いたいのをこらえて、笑ってみせました。もともと兄と姉はあまり折り合いが良くなかったし、事実、二十年ぶりの再

会だと云うのに、今日も二人はほとんど口をきいていません。姉さんがいない方が、彰一兄さんとも気兼ねなく話せるでしょう。それに、その代わりと云っては何ですが、由希子ちゃんが一緒に泊まっていくと云って呉れました。

「あたしもお婆ちゃんの家に泊まってい。ねえ、いいでしょう？」

由希子ちゃんは単純に喜んでいます。屈託のない笑顔。由希子ちゃんにとっては、お盆の里帰りとなんら変わることはないのです。しかし、玲子姉さんは困惑し、亮平さんは眉をひそめました。

「由希子、おまえが居ては迷惑だろ。一緒に帰るんだ」

「嫌だ、泊まってい！」

駄々をこねる由希子ちゃんに、亮平さんの顔が更に険しくなります。

「大丈夫ですよ、お義兄さん。やる事と云っても、線香の火を絶やさないようにするだけです。由希子ちゃんが寝る部屋も布団も幾らでもありますから。それに……ここに泊まるのも最後でしょうから――」

また由希子ちゃんが殴られる前に、私は慌てて口を挟みました。母だって、最後の夜ぐらい可愛がっていた由希子ちゃんが居て呉れた方が喜ぶでしょう。亮平さんは仕方なさそうに溜息をつく、と、渋々承諾して呉れました。

「わかった。云う事を聞かなかったら、遠慮無く殴ってやって呉れ。口で云って理解できる子ではないんでネ。まったく、お義母様が甘やかした所為で」

「そんな事……！」

？然とする私をよそに、姉夫婦はそそくさと帰ってゆきました。静寂に包まれた霧乃宮邸は、たった三人だけになって仕舞いました。まるで、無人の孤島に取り残されたようです。こんな空寒い屋敷に、母はたった一人で暮らしていたのかと思うと、その虚無感に押し潰されそうです。どれほど寂しかった事でしょう。私は居たた

まれない気持ちで、母の前に座りました。彰一兄さんも、由希子ちゃんも、私の隣に腰を下ろします。死に装束の母を、無言で見つめる三人。仏壇の鑑燭が、横たわる母の骸を仄暗く照らしています。畳に映る影が、揺らめく鑑燭の炎に合わせて形を歪めました。それはまるで、姿の見えぬ魔物の様です。どこからか、先程と同じ甲高い笑い声が、私の耳朶じだを颯なぶりました。

第四話 霧乃宮彰一の悔恨

「香奈恵、随分と迷惑をかけたね」

姉夫婦が帰ると、彰一兄さんは憔悴しきった様子で云いました。

「俺のことを恨んでるだろう？ 突然出ていったきり、二十年間一度も戻らなかったんだ。許せないのは当然だと思う。云い訳をする積もりはないよ。本当に済まないことをした。香奈恵にも、おふくろにも」

自嘲気味に唇を歪めたその横顔を、洋燈の光が照らします。落ちくぼんだ？に影を落とし、それはさながら髑髏のようでした。広くなった額と真っ白になった残りの髪が、二十年という時の流れを物語っています。特徴的だった大きく聡明な印象を与える双眸さえも、人生に疲れ切ったようになっての光を失っていました。霧乃宮の家に居た、まだ青年だった頃の彰一兄さんの面影はどこにもありません。

兄さんの目に映る私の姿も、同じように変わり果てているのです。よう。兄さんと最後に会ったのは、私がまだ女学生だった時です。学校から帰ってきたある日、この家に彰一兄さんの姿はありませんでした。あれから二十年——時間は残酷にも、人の若さを喰らい尽くしていました。そしてそれは、兄への遺恨に凝り固まった心境に変化を及ぼすのにも充分でした。

「確かに、少し前までは兄さんのことを恨んでいたわ。兄さんが戻って呉れば、お母ちゃんだって淋しい思いをせずに済んだだろうし、お父ちゃんの代わりに葉問屋を継いでいれば、霧乃宮の家だって存続できたのにな。自分勝手な彰一兄さんのことは許せなかったけど、でもそれも兄さんの人生かも知れないね。今までもこれから、ずっと罪の意識を感じながら生きてゆくのは辛いことだろうし、そう考えると自分の生きたいように生きるのも楽じゃないんだろうなって」

「……」

彰一兄さんは何も答えませんでした。責める積もりはありませんし、兄さんも云い訳じみたことは云わないと決めているようでした。

「清花さんだっけ？ 元気にしてるの？」

駆け落ちしたと聞かされた、カフェの女給。その名を口に出すと、兄を奪い去られた憎しみに身が焦げそうです。私にとっては、霧乃宮家を破滅に導いた悪魔の名でした。一度も会ったことはありません。赤い口をきつと獰猛な猛禽類のような顔に違いありません。赤い口をぱつくりと開け、高らかな笑いを発しているのです。

「清花は……彼女は——」

彰一兄さんは初めて私を正面から見据えました。

「いや、そうだな。仲良くやっているよ」

そう云ったきり口を噤んでしまいます。その目は明らかに何かを訴えようとしていたのに。私は訝しみました。それ以上追求することは憚られました。

「それより、聡太郎さんは？ おふくろの葬儀には顔を出さないのかい」

兄さんは自分の話題を避けるように、私の良人のことを尋ねました。季節の折りの手紙で、兄妹の近況は伝えております。彰一兄さんは夫との面識はありませんが、聡太郎という名前や、私より十五歳も年長であること、爵位を持つ華族であることは知っていました。

「あの人は独逸に行つて仕舞つて、来月しか戻つてこないの。知らせを出したところで、間に合うわけないし」

「そうか……。折角お会いできると思ったのに残念だな。でも、香奈恵は仕合わせそうで良かったよ。子爵の奥様なら、きっと何の苦労も無いのだろうね」

嫌味ではなく、妹の仕合わせを心から喜んでるように彰一兄さんは云いました。実際には華族であろうと「何の苦労もない」ということはあり得ません。毎日、毎日、特にやることもない、うんざりするほど退屈な日々。話題と云えば「令女界」に綴られているよ

うな、どちらの伯爵邸でどのような会合があり、何方の奥様と何方の令嬢がどのような絢爛な装いで姿をお見せになったか、というゴシップばかり。ほとほと倦み果ててはいても、華族の世界で生きてゆくには避けて通れませんでした。それはある意味、無為に時間が過ぎるのを待つ牢獄と同じです。

しかし、私は何も云わず、曖昧に微笑んで見せました。彰一兄さんがどのような人生を送ってきたのかは解りませんが、私の苦勞など、そもそも住む世界が違うかれには決して理解できないことです。同じ家で幼少時代を過ごしながら、大人になってしまえば兄妹は他人も同然でした。

「おふくろは何か云っていたかい？ 俺の、恨み言とか。それとも……」

「ずっと、彰一兄さんに会いたがっていたわ」

死の間際は、鬼が乗り移ったような姿だったことは云えませんが。これ以上、兄を罪の意識に苛ませることもないでしょう。

「——他には？」

「他って？」

「何か俺に伝えたいことがあったとか」
妙に、彰一兄さんは問い詰めてきます。

「云いたいことはたくさんあったでしょうけど、私は何も聞いてないわ。最期にお母ちゃんに会ったときは、もう意識を無くしていたのだし。玲子姉さんに聞けば何か知ってるかも知れないけど」

「そう——」

彰一兄さんは、失望とも安堵とも云えぬような溜息をつきました。

「お母ちゃんの口から、何か聞きたいことでもあったの？」

「いや、何でもないよ」

怪訝な顔をする私を誤魔化すように、兄はつと視線を逸らしました。

「……」

何となく、彰一兄さんの態度が腑に落ちません。根が単純という

か、正直者の兄さんは隠し事が出来ないたちで、すぐに顔に出て仕舞います。歳を取っても、その性格は変わらないようでした。私は、兄が何か秘密を抱えていることを察しました。でも、云いたいことはたくさんあっても、矢張り久しぶりに再会した彰一兄さんを追い詰めることはできません。その代わりにまずは、兄さんを奪った女へと向かいます。

「それより、清花さんは来ないの？ 霧乃宮家の長男の嫁が姿を見せないなんて、世間に示しがつかないのではなくて？」

彰一兄さんは困ったように頭を掻きながら、気まずそうに俯きました。

「清花はお母ちゃんが死んだことは知らないし。俺も、香奈恵からの手紙を見て、慌てて出てきたから。せめて死に目に会えればと思っていたけど、間に合わなかったな。本当に済まなかった」

「じゃあ、明日の葬式には清花さんもいらっしやるの？」

何となく清花さんのことから話題を逸らそうとする兄を、柔らかに引き戻します。彰一兄さんはまた何か云いたげに私を見つめ、しかし結局、口を閉ざして仕舞いました。

「……兄さん……」

「済まない、香奈恵。もう、何も聞かないで呉れないか。霧乃宮家の者として、責任は取る積もりだ。それに、おふくろには申し訳ないけど、亮平さんの仕打ちにはどんなことでも耐えるから。俺を喪主に立てないのならそれでもいい。だから——」

「わかった」

何だか彰一兄さんが気の毒になって、私は遮りました。

「もういいよ。きっと兄さんとは一生会えないと思っていたけれど、こうして来て呉れたのだし。いいよ、もう何も聞かない。その代わり、ちゃんとお母ちゃんの供養をしてあげてね」

彰一兄さんは唇を噛みしめ、体を震わせていました。

「済まない。本当に済まない、香奈恵……」

兄にとっては、激しく罵声を浴びせられた方が楽だったかも知れ

ません。私が許した所為で、彰一兄さんは私に聞いて欲しかった筈の二十年を語る機会を無くしてしまったのですから。その、決して仕合わせではなかったであろう人生を。

「あれ、そう云えば由希子ちゃんは？」

兄との話に夢中になっていた所為で、いつの間にか隣に座っていたはずの由希子ちゃんがいなくなっていたことに気づきました。

「兄さん、由希子ちゃんがどこに行ったのか知らない？」

彰一兄さんも、はっとして辺りを見回します。私たちは完全に由希子ちゃんのことを失念していました。

「どこに行ったんだ。さっきまでそこに居たじゃないか」

彰一兄さんは立ち上がり、襖を開けて隣室をのぞき込みました。

私も縁側の障子を開け、庭を見渡します。

「由希子ちゃん、どこにいるの！」

暗闇に向かって大きな声を出しますが、返事はありません。広い霧乃宮邸ですが、私と彰一兄さん以外に人の気配はなく、闇と静寂そして焼香の匂いだけが漂っています。由希子ちゃんの姿はどこにもありません。

「外に出ていったのかな」

「こんな時間にか？」

彰一兄さんは不安そうな顔で玄関先を見やりました。私も兄さんの傍らに立ち、土間を見下ろします。草履は残っていますが、幼子同然の由希子ちゃんのこと、裸足で出て行ったとも限りません。

「『赤マント』にでも掻っ攫われたら何うするんだ」

『赤マント』――。それは最近、新聞を賑わせている誘拐犯のことでした。帝都ではこのところ若い女性が何人も行方不明になっており、それは裏地が赤いマントを羽織った、洋装の紳士の仕業だと噂されるのです。こんな時間に外に出れば、由希子ちゃんも『赤マント』に攫われて仕舞うかも知れません。

「俺、心配だから見てくるよ」

彰一兄さんはそう云って、玄関を下ります。

「一人で大丈夫なの？」

「出ていったとしても、まだそれほど遠くには行っていないだろう。ひょっとして庭先にいるのかも知れないし。香奈恵はここで待っていて呉れ。どちみち、おふくろを一人にすることはできないだろう」

確かに彰一兄さんの云うとおり、仏様を放っておくわけにはいきません。

「わかった。私も、もう少し家の中を探してみるわ」

「そうして呉れ。由希子ちゃんが居なくなっただなんて、亮平さんに何て言い訳していいかわからないからね。大丈夫、必ず見つけてくるよ」

由希子ちゃんが失踪したと聞いたって、亮平さんは意に介さないでしょうけど――。しかし私はその言葉を飲み込み、黙って頷きました。

彰一兄さんが出て行って仕舞うと、霧乃宮邸はやけにがらんとしたようでした。蠟燭の芯が燃える音が聞こえるほどに静かです。昼間でも寂しくなるほどに広い屋敷は、夜になると発狂しそうな寂寥感に包まれます。私は仏間に戻って手燭の蠟燭に火を灯し、隣室の襖を開けました。しかし、押し入れもない六畳の和室には、誰も居ません。

「由希子ちゃん、何処にいるの」

自らを鼓舞するように、ことさら大きな声を張り上げます。返事はありません。発した声が、木霊しているような錯覚に襲われます。空気は冷え冷えとして湿り気を運び、自分が生まれ育った家でありながら、どこか薄気味悪さを感じさせました。

「由希子ちゃん！」

私は更に大声で、姪っ子の名を呼びました。手燭の光が襖に私の影を大きく映し、嘲笑うかのように揺らめきます。矢張り返事はありません。一人が住まうには広すぎる霧乃宮邸。今ここにいるのは、私と母の遺体だけなのでしょう。不意に心に湧き起こる猛烈な孤

独感と恐怖。私はそれを無理矢理押し込め、荒々しく南側の障子戸を開けました。暗闇に手燭の炎を掲げますが、ここにも人の気配はありませんでした。

失望と安堵の入り交じった溜息を吐き、私は更に屋敷の奥へと向かいます。しかしその時、誰かがゆっくりと歩く足音が耳につきました。

「由希子ちゃん？」

答えはありません。しかし確かに、衣擦れと畳を踏みしめている音です。近づいているのか、遠ざかっているのかわかりません。静寂が押し包む屋敷の中で、その音はやけに大きく聞こえました。

「ねえ、由希子ちゃんなの？ そうなら返事をして頂戴」

云いながら、私は自分の発した台詞に何だか笑いが込み上げてきます。由希子ちゃんでないなら、一体誰がこの家にいると云うのでしょうか。自嘲しようとして失敗し、唇の端が引きつるのを感じました。戦慄しながらも、正体を確かめずにはいられません。何しろ、存在がわからないものほど怖いものはないのですから。例えばそれが、死に装束に身を包み、夜叉の形相を呈したまま徘徊する母だったとしても。

それは、霧乃宮に生まれ育った者としての矜持だったのでしょうか。没落した旧家とは云え、他人に土足で上がられるような真似を許すわけには参りません。私は意を決し、足音の聞こえる炊事場の方へと向かいます。

第四話 霧乃宮彰一の悔恨（後書き）

霧乃宮香奈恵は子爵の家に嫁いだという設定ですが、実際には華族と平民の婚姻はあり得ず、それによって爵位を得ることもなかったそうです。

第五話 獨體もの云ふ帝都の月夜

私は一旦、仏間から縁側へと出ました。桜が見える家の東の縁側は北へと延び、突き当たって左に折れています。足音が聞こえるのは、その先にある炊事場の方でした。しかし炊事場は土間ですから、実際にはその隣にある、かつて使用人が寝起きしていた部屋の辺りを誰かが徘徊しているのでしょう。私は手燭に灯る小さな炎を頼りに、暗い回廊を進んでゆきます。障子から差し込む月影は蒼く、いつそう闇が深まるようです。

北の、東西に延びる縁側は、炊事場にたどり着く手前に屋敷の南へと通じる廊下とも通じており、かれ——それとも彼女——は、そこを歩いているようです。ひどく、ゆっくりとした足取りです。

私は必死に恐怖をこらえ、縁側から廊下へと向かいました。

「そこにいるのは誰？」

毅然とした声で誰何すいかしました。掲げた蠟燭が、怪しい人影を映します。照らし出されたのは黒い髪と黒い着物、それと対照的な、夜目でもわかるほどの白い肌——。しかし、それが誰なのかを理解したとき、私は拍子抜けして大きく息を吐いたのでした。

「由希子ちゃん……」

体から、一気に力が抜けて仕舞いました。思えば至極当然なことです。この家に残ったのは、私と彰一兄さんと由希子ちゃんだけだったのですから。呼んでも返事がないことから、闖入者か、はたまた幽霊かと思っていました。よく考えればそれは由希子ちゃんに他なりません。

私はもう一度溜息をついて、彼女に歩み寄りました。

「由希子ちゃん、こんなところで何うしたの？ 突然いなくなるから心配したじゃないの。さあ、お婆ちゃんが寂しがっているから、あっちの部屋へ戻りましょう」

呆けた表情の由希子ちゃんの手を取り、私は諭すように云いまし

た。

「助けてって……」

「え——？」

「女の人がね、助けてって云っているの」

由希子ちゃんは何を云っているのでしょうか。私は眉をひそめ、まるでどこかで聞いた怪談でも話しているような姪っ子を見やりました。彼女の目は、悪意の欠片もない澄んだ眸をしています。

「女の人が私を呼んだのよ。寒いんだって。暗くて、息が苦しいって」

由希子ちゃんが虚言を吐いたり、私を騙そうとしていることは考えられません。白痴である彼女には、他人を謀るような知恵はないのですから。信じられませんが、由希子ちゃんは本当に幽霊でも見たのでしょうか。白昼に現れた桜の木の下で鬼といい、この屋敷に一体どれほどの亡霊が巣くっているのでしょうか。本当に、長い歴史のある旧家などろくなものではありません。その歴史は、数多の人の血に塗られているのに違いありません。ですから。それは、私が嫁いだ頼友家とて同じでしたけれど。

「兎に角、お婆ちゃんのところに戻りましょう、ね。由希子ちゃんがいないと、お婆ちゃんだって寂しがるわよ」

もう一度云い、由希子ちゃんの手を取って仏間へ向かおうとします。しかし、由希子ちゃんは抗うようにその場を動かうとしません。

「可哀想だよ。寒いんだって。真っ暗で苦しいんだって。ねえ、叔母ちゃん、助けてあげてよ」

真剣な眼差しで、なおも繰り返します。私は自分が粟立つのを感じながら、無理矢理由希子ちゃんの手を引きました。叫びだしたいのを必死でこらえている所為で、呼吸が荒くなります。普通なら馬鹿馬鹿しい話と一蹴したのかも知れませんが、壮絶な母の死を目の当たりにして、随分と気が立っていたのかも知れません。思えば昨日だってほとんど寝ていないのですから。恐怖は苛立ちとも、怒りともつかぬ感情に変わり、思わず由希子ちゃんを睨みつけて仕舞い

ました。由希子ちゃんもそんな私から険悪な雰囲気を感じたのでしよう。もう、何も云わず導かれるままについてきます。

仏間に戻ると、私はその白い手を握ったまま、仏となった母の前に座りました。 かつて、たった一人でこの家で暮らしていた母は、屋敷の中に何かが居ることを知っていたのでしょうか。由希子ちゃんの前に現れた幽霊、そして桜の木の下に立つ鬼は、お母ちゃんの前にも姿を現したのでしょうか。しかし、そんな話は聞いたことがありません。もともと、私には隠していたのかも知れませんが。

隠していると云えば、彰一兄さんは何を隠しているのでしょうか。お母ちゃんも、彰一兄さんも、玲子姉さんも、みんな昔から私には肝心なことは何一つ話しては呉れませんでした。上の二人とは年の離れた三人兄妹の末っ子で、両親にとっても、兄さんや姉さんにとっても、私はいつまでも幼い子供の「香奈恵ちゃん」なのです。

私は長いこと何も知らないふりをして、じっと霧乃宮家を見てきました。母は養子に迎えた父、竜三を決して愛しておらず、使用人の一人と通じていたこと。そんな母を、玲子姉さんは軽蔑していたこと。—— 玲子姉さんは女学校を出てすぐ、霧乃宮家から逃げるように亮平さんと結婚したのはその所為です——

彰一兄さんは可笑しいくらい父とそっくりで、とても霧乃宮家を背負っていきけるような甲斐性はないこと。そして、そのことを祖父の藤太郎はずっと憂いていたこと。どのみち、霧乃宮家は没落の一途を辿っていたのです。

私は結構な歳になってからも、何も気づかない、無垢な「香奈恵ちゃん」を演じてきました。自分が無邪気な子供でいることが、崩壊しそうな家族をつなぎ止める唯一の鎧かすがいであること、それが私の役割であることを、幼少の頃から知っていたからです。

そうして、遠からず霧乃宮家は終焉を迎えることも……。

白い布がかぶせられた母の遺体。それに目をやりながら昔に思いを馳せると、私の双眸にはようやく悲しみの涙が溢れたのでした。

ほどなくして、彰一兄さんが駆け込んでくる足音が聞こえました。私は慌てて目元を拭ぬぐいます。息を切らせて部屋に入ってきた彰一兄さん。

「由希子ちゃん！」

何事もなかったかのように私の隣で正座している由希子ちゃんを見て、彰一兄さんは安堵の笑みを浮かべました。

「良かった。由希子ちゃん、居たのか……」

心優しい兄のこと、姪っ子を心配してそこらじゅうを奔走したに違いありません。外は今日も冷え込んでいるのに、その額には汗が滲しみんでいました。

「家の一番奥——昔、使用人が寝起きしていた部屋の前に居たよ。足音が聞こえてきたから、最初は幽霊でも居るのかと思ったわ」私は先程感じた恐怖を冗談に紛らわそうと、つとめて明るく云いました。少し声が震えていたかも知れません。

「幽霊なら、足音なんてしないのじゃないのかい？」

彰一兄さんはそれには気づかなかった様子で、鼻で笑って私の戯言を一蹴します。

「それにしても、由希子ちゃんは何でそんなところに居たんだい？」

「それが——」

私が云い淀むと、それまで慥然とした表情で座っていた由希子ちゃんは突然に立ち上がり、柳眉りゅうめいを逆立てて彰一兄さんを見据みまもえました。

「女の人がね、助けてって云ったんだよ。暗いところに閉じこめられているの。苦しいんだって」

由希子ちゃんの言葉は、まるで予言者の宣告のように薄暗い仏間に響き渡ります。そして、自らの役割は終えたと云わんばかりに、再び座り込んで仕舞いました。

立ちこめる麝香の煙が揺らいだのは気のせいでしょうか。通夜の

最中に聞こえた品のない笑い声が、またも耳朶をかすめます。私は戦慄して言葉を失いましたが、彰一兄さんもそれを聞き、顔色が一变します。蒼褪めたその表情から、明らかな動揺が見て取れました。

「兄さん、何うしたの？」

私は訝しみ、じっと兄を見ました。由希子ちゃんの言葉に、彰一兄さんが本気で恐怖を憶えたとは思えません。何か知っているのでしょうか。

「いや、何でもないよ」

無理矢理笑おうとしたのか、？が引きつっています。それは昔と変わらぬ、何か隠し事をしているときの兄の癖でした。顔を背け、目を合わせようとしないのも同じです。彰一兄さんは、一体どれほどの秘密を抱えているのでしょうか。そうして、それはどれほどの重荷なのでしょうか。

私は暫し逡巡しましたが、意を決して云いました。

「兄さん、何を隠しているの？」

「え——」

彰一兄さんは心底驚いたように瞠目しました。よもや私からそんなことを聞かれるとは思ってもよらなかったのでしょうか。兄の中では、私は今でも「小さな香奈恵ちゃん」なのですから。

「ここには私と兄さんしか居ないわ。由希子ちゃんは——居ても問題ないでしょう。さっきは聞き損ねたけど、もう全部吐き出したら？ お母ちゃんも死んじゃったし、誰にも何も隠す事なんて無いじゃない」

「隠してるって……俺は別に何も——」

そう云う彰一兄さんの目は泳ぎ、額には走って帰ってきたときのものとは違う、じっとりとした汗が浮いていました。

「よく考えたらおかしいものね。いくらカフェの女給との駆け落ちだからって、二十年もの間、一度も家に戻らなかったなんて。お母ちゃんがそこまで頑なに兄さんを許さなかったとも到底思えないし、兄さんは私たち兄妹とも会おうとしない。——私ね、兄さんの

家まで行ったことがあるんだよ。手紙に書いてあった住所を頼りに。でも、そこには全然知らない人が住んでいた」

「そ、それは……」

「いいのよ」

云い淀む兄さんを、私は遮りました。

「兄さんが誰とどこに住んでいるかはもういいの。それより……ねえ、何うして家を出ていったの？ 本当は駆け落ちなんかじゃないんでしょう。本当は、清花さんなんて居ないんでしょう？」

「……」

彰一兄さんは文字通り言葉を失い、馬鹿みたいに口を開いたまま呆然と立ち尽くしていました。私がそこまで見抜いているとは考えてもみなかったのでしょう。かれは自らを落ち着けるようにゆっくりと浅い呼吸を繰り返し、やがて観念したのか、力が抜けたように座り込んで仕舞いました。

「いつから、知っていたんだ？」

「いつからかな。ただ、真面目で人の良い彰一兄さんが、たった一人の女性のために全てを捨てるなんて考えられなくて。もちろんそういう人も居るのだろうけど、少なくとも兄さんはそんな人間じゃないわ。そう思うと、他に理由があったんじゃないかって考えるようになったの」

私の言葉を聞きながら、彰一兄さんは自嘲の色を浮かべてうなだれました。その様子は、妹の私から見てもひどくやつれていました。「……わかった。白状するよ。どうせ、もう時効なのだし」

それでも彰一兄さんは、なおも云うのを躊躇っているようでした。云いかけては唇を湿し、なかなか話そうとしません。私は辛抱強く待ちます。ようやく口を開いた彰一兄さん。

しかし、次に兄の口から発せられた言葉を聞いたとき、今度は私が見開いたまま絶句する番でした。

「俺は……実は——」

意を決したように、堅く目が閉じられます。

「俺は——親父を、殺したんだ」

一瞬、私は兄が何を云っているのか理解できませんでした。父を——お父ちゃんを殺した。

「そんな……そんな筈はないわ。お父ちゃんは放蕩三昧の挙げ句、若い女郎に入れ込んで駆け落ちしたって！」

「ということになっているが——」

「なっているって、だってお母ちゃんが……！」

云いかけて、私はふと気づきました。思えば父が蒸発したという証拠はどこにもありません。もともと不在がちな父でしたが、ある時を境に、まったく姿を見せなくなったのです。訝しむ私に、女郎と駆け落ちしたと云ったのは、他ならぬ母でした。私はそれを疑うこともなかったのです。

「まさか……」

呆然とする私に、彰一兄さんが頷きます。激しい喉の渇きをおぼえながら、私はひどくのろのろと、北枕で眠る母に目を向けました。

「おふくろも知っているよ」

それは、お母ちゃんも共犯ということでしょうか。さすがの私も予想だになかったことで、体の震えが止まりません。

「何うしてお父ちゃんを殺したの？」

信じられないのに、聞きたくもないのに、聞かずにはいられません。

「殺す積もりはなかった。と云ったところで云い訳にしかならぬが。清花のことで口論になって、つい——」

兄の話によると、清花さんという女性と付き合っていたのは本当のようでした。霧乃宮家の跡取りともあろう者がカフェの女給に入れあげるのを見かね、父が諫言した。それが口論となり、父を突き飛ばしたところ、打ち所が悪くて死んで仕舞ったそうです。

話し終え、膝の上で握りしめる兄の両拳は真っ白でした。まるで、死に装束から覗く母の踝のように。

「それ、本当なの？」

矢張り私には信じられません。偶然とは云え、気弱な彰一兄さんが父を殺めることが出来たなんて。

「ああ。すぐに騒ぎを聞きつけて、すぐにおふくろが飛んできたよ。うろたえるだけの俺と違い、死体を見たおふくろは、蒼褪めながらもそれを埋めることを思いついた。霧乃宮家から殺人犯を出すわけにはいかない。おふくろは、親父の命より霧乃宮家の世間体の方が大事だったんだ」

「埋める……？」

私はぼんやりと反芻しました。お父ちゃんを殺し、死体を埋める。それはまるで、いつか読んだ新聞記事のように現実味がありません。

『帝都に現る赤マント』

『忽然と消ゆる若き女性』

『依然、行方は知れず』

『殺害し、山中に埋めたか』

扇情的に書き立てる帝都新聞。それを読みながら、いったい人を殺して埋めるとはどんな気持ちだろう。どんな人でなしの極悪人だろうと想像したのですが、まさか自分の兄がそれと同じ所業をしていたとは夢にも思いません。

「埋めるって、どこに？」

私の問いかけに、彰一兄さんは縁側に面した障子の方を指さしました。

「あの桜の木の下に」

「……」

私の耳朵に、誰かが生暖かい吐息を吹きかけます。一瞬、背筋がぞくりとします。思い出すのはこの季節、いつも縁側で桜を眺める母の姿でした。あれは、父の亡霊を見ていたのでしょうか。白昼に現れた鬼は、父、竜三の怨念なのかも知れません。きっと母もあの鬼を見ていたのでしょう。

出奔したと思っていた父は、ずっと庭の下に居たのです。その遺体は土の中で腐っています。蛆虫は父の腐肉を喰らい、脳漿を啜り、

どす黒い血に濡れて蠢いていたのです。恨みを込めた眼球は溶け、呪詛の言葉を凍り付かせた舌は抜け落ち――丸々と肥えた蛆虫は眼窩を這い、暗い口腔を舐め、やがて蠅となって屋敷を飛び回っていたのでしょうか。

母は全てを知りながら、色づく桜を眺めていました。思えばそれは何とおぞましい光景でしょう。父は今もこの庭に、白骨死体となって埋もれているのです。

私は絶句したまま、いつまでも彰一兄さんを見ていました。本当に、かれは彰一兄さんなのでしょうか。気の所為か、障子の隙間から誰かが覗いている気配がしました。

第六話 血染めの系譜

「おふくろが生きていたときは、迷惑がかかると思ってたずっと黙ってきた。でも——」

そう云って横たわる母を見やる彰一兄さん。その目には、再び涙が浮かんでいます。

「ごめん、おふくろ。矢張り俺は、墓場まで秘密を持って行くことは出来なかったよ。折角おふくろが逃がして呉れたのに」

涙は止めどなく溢れ、嗚咽に変わります。彰一兄さんは、もう自責の念に堪えられなかったのでしょうか。今まではただ、母のために沈黙を守っていたにすぎません。しかしその母も亡き今、彰一兄さんに秘密を守り通す気力はありませんでした。

「家に戻ってきたら、おふくろや香奈恵の顔を見たら、俺は心が折れて、何もかもぶちまけて仕舞っただろう。だからこの二十一年間、一度も帰ってくることはなかった。いや、帰ることが出来なかったんだ」

彰一兄さんは、なおも独白を続けました。

「おふくろの死に目に会えないことは覚悟していた。兄妹にも会うことはないだろうと思っていたし、俺の所為で霧乃宮家が終わって仕舞うことも、本当に申し訳ないと思っている。でも、兎に角、俺が秘密を守らなければ……それが——おふくろの願いだったから。それが、俺の出来る最後の親孝行だと思っていたから——」

苦悶の表情で語る彰一兄さんの姿は、あまりに痛々しいものがありました。二十一年間、いったいどれ程の苦しみを負ってきたのか。やつれ、変わり果てたその姿が、罪の意識に煩悶した年月を物語っています。自首した方が、ずっと楽だったに違いありません。一人で抱えるには大きすぎた秘密。ずっと誰かに打ち明けたくて、そうして今、兄さんは私に話すことでようやくその咎を償い終えたのです。

それを思うと、私はもう彰一兄さんを責める気にはなれません
した。

「辛かったね」

兄とは云え、親殺しの犯人にあまりに甘い言葉でしょうか。でも、
霧乃宮家の血に翻弄された彰一兄さんの人生だって、同情せずにい
られません。

「済まない、香奈恵」

「もういいよ」

私は泣き崩れる彰一兄さんに寄り添いました。

「それより、そのこと玲子姉さんは知っているの？」

「まさか。俺が玲子に云えるわけじゃないか。そんなことを
知ったら、あいつのことだ、真っ先に警察に駆け込むだろうよ。も
ちろん、おふくろだって玲子には云う筈ない」

それは確かにその通りです。玲子姉さんは、自らが霧乃宮家に生
まれたことを憎んでいるとでも云うように、一刻も早く家を出たが
っていました。ろくに仕事もしない父のことは愚弄していましたし、
どういう訳か、彰一兄さんとも折り合いが悪かったのです。

そして、外で多くの妾めかけを作る父への復讐のように、使用人と姦通
している母を蔑んでいましたし、その所為で母も玲子姉さんに対し
ては随分と気を遣っているようでした。玲子姉さんが母を引き取っ
たのは、娘としての義務感や憐憫などではなく、含むところのある
亮平さんの指図だったのでしょうか。そんな姉さんに、母がこのよう
な大それた秘密を語ったとは思えません。

私は自分が震えていることを自覚しながら、恐る恐る母の遺体に
目を向けました。誇り高い母だとは知っていましたが、霧乃宮家の
体裁を守る為に、そこまでするとは思いませんでした。

でも考えてみれば、父が妾を何人も囲っていることを知りながら、
母は決して養子である父を追いつくとはしませんでした。離婚す
れば世間の笑いものになる。母にとっては、自分の仕合わせよりも
世間体の方が大切だったのです。もし、霧乃宮家から人殺しが出た

ということが知れ渡れば、それは耐え難い屈辱だったに違いありません。彰一兄さんの罪を隠し通す為なら、殺人の片棒を担ぐことも厭わなかったのでしょうか。

「ねえ、あそこに誰かが立っているよ」

不意に、由希子ちゃんが部屋奥を指さします。私と彰一兄さんは、思わずその方向を見ました。

「さっき私を呼んだ人だ。良かった、助かったんだね」

嬉しそうな笑顔を見せる由希子ちゃん。しかし、そこには誰も居ません。彼女には、この世の者ならざる者が見えるのでしょうか。霧乃宮家に取り憑く亡霊たち。桜の木の下で眠る父は、いったいどんな顔をしているのでしょうか。由希子ちゃんに聞いてみたい気がします。

私は何となくうんざりして、溜息をつきました。

「私は、父の死体があることも知らずここで暮らしていたのね。

亮平さんが知ったら何う思うのかな。死体のある家——それでも、霧乃宮家を手に入れようとするのかしら」

「何だって？」

怪訝な顔で、彰一兄さんが云いました。

「亮平さんがこの家を欲しがっているのかい？」

「そうよ。財産はほとんど残っていないけど、屋敷や広大な敷地は充分お金になるだろうから。そんな下心でもなけりゃ、いくら私が頼んだとは云え、お母ちゃんを引き取ったりなんてしないわ。お金なんて腐るほど持っているのに、本当に欲深いと云うか……」

しかし、彰一兄さんは腕を組んで俯き、何か考えているようでした。

「それは妙だな」

「何うして？」

彰一兄さんの言葉に、今度は私が首を傾げる番でした。

「考えてもみ給え。香奈恵が云うとおり、亮平さんがこの屋敷を手に入れて、いったいどんな得があるんだい？」

「それは……」

「確かに――」

云い淀む私を、兄さんが制します。

「確かに、わかばかりとは云え、霧乃宮家の財産は残っている。しかし、亮平さんほどの人が躍起になって奪うような価値は無いはずだ。呉れると云うならいざ知らず、今さらこの屋敷程度の金を得るために、あと何年生きるかもわからなかったおふくろを引き取る筈がないと思うんだが」

「……」

彰一兄さんの言葉に、私は呆然として仕舞いました。云われてみれば、その通りの気がします。亮平さんは、打算的な人です。自分が損をしてまで人の為に動くことを、何よりも嫌います。義理立てするだけの理由で母を引き取る筈がありません。

「それじゃあ、亮平さんは何うしてお母ちゃんの面倒を引き受けたの？ 嫌がる玲子姉さんを説き伏せてまで。それに、お母ちゃんの葬儀に兄さんを喪主に立てなかったのだって、霧乃宮家に乗っ取る為の布石だったと思うんだけど」

彰一兄さんは、眉根を寄せてなおも考え込みました。

「俺も亮平さんの性格をよく知っているわけじゃないが、何か企んでいるのは事実だろうな。まあ、喪主を立てなかったのは、俺への当てつけとしても。目的が本当にこの家だとして、亮平さんには何の得があるのか……」

私にわかる筈がありません。兄さんも押し黙ったまま、答えを求めように仏壇に目を向けました。漂う麝香じゃこうの煙に、気まずい沈黙が混じります。燭台で燃える蠟燭の炎は、その静寂を躊躇いがちに破るように、かすかな音を立てて揺らめきました。

「お母ちゃん、矢っ張り玲子姉さんの家に行ってから何かあったのかな」

私は沈黙に耐えかね、もうひとつの疑問を口に出しました。

「何かって？」

「うん、実はね——」

一瞬、云うのを躊躇いましたが、矢張り彰一兄さんにも話しておいた方がいいのでしょうか。

「お母ちゃんの最期、結構大変だったんだよ。意識は三日前からなかったのに、臨終の間際になって目を覚まして」

云いながらその時の鬼の形相を思い出し、私は戦慄しました。思わず布団に横たわる母から目を背けます。

「それはもう、何かが乗り移ったみたいに恐ろしい顔をして、『まだ、ここに来ておらん者がいる』って」

脅かす積もりはありませんでしたが、そう云う私の口調は、昨夜のしゃがれた母の声にそっくりでした。

「お、俺のことか？」

彰一兄さんは、驚愕に目を睜りました。私はゆっくりと頷きます。

「多分、そうだと思う。お母ちゃんが会いたがっていた人なんて、兄さんしかいない筈だし」

「……」

彰一兄さんは、再び苦悶の表情を浮かべてうなだれました。

「いえ、違うの。兄さんを責める気はないわ。——ただ、お母ちゃんは『騙された』というようなことを云っていたから……」

私の脳裏に、昨夜の母の言葉が甦ります。

——謀^{たばか}りおって……おまえらは、よってたかって儂を謀りおって……

それが何を意味するのも、ずっと気になっていたのです。

「俺にはわからん。何しろ、二十一年間一度もおふくろに会っていないのは本当だ。そのことを恨んでいたと云われれば返す言葉もないが——しかし、俺は自分が二度と霧乃宮家を訪れないことが最良だと思っていたんだ」

「だから、兄さんを責める積もりはないわよ。目を覚ましたと云っても意識は混濁していたのだろうし、出た言葉に何の脈絡もなかったのかもしれないけど、でも、お母ちゃんの最期の言葉だったか

ら、何うしてほしかったのかなと思って」

「例え亮平さんのところで酷い仕打ちを受けていたのだったとしても、おふくろを見捨てた俺に文句を云える筋合いはない」

彰一兄さんは、自嘲の響きを交えて云いました。

「そもその原因は全て俺だからな。身から出た錆だ。誰に何を恨まれようとも、仕方ないじゃないか。そりゃあ、おふくろだって俺を恨んでいたし、失望もしていたと思うよ」

私は彰一兄さんの言葉に、どこか釈然としないものを感じていました。確かに霧乃宮家の矜持を重んじた母であれば、兄さんには失望していたのかも知れません。しかし、『謀る』とはどういう事なのでしょう。彰一兄さんが、いつ母を謀ったと云うのでしょうか。

もったも、死の間際の譫言であれば、何の意味もなかったと考えるのが筋かも知れませんが……。

薄暗い座敷を、再び沈黙が支配します。畳に落ちる影が、大きく揺らめきました。気がつく、仏壇に灯された蠟燭が消えかかっています。私は立ち上がり、燃え尽きようとしている線香と蠟燭を取り替えました。本来は金箔で塗られていたはずの霧乃宮家の仏壇は煤で真っ黒に汚れ、位牌の向こうは地獄へと続く通路のようです。母の魂は、既に黄泉の旅路を歩んでいるのでしょうか。

ぼんやりと物思いに耽っていた私の傍らに、誰かが立ちます。

「由希子ちゃん？」

それまで黙って座っていた由希子ちゃんは、突然立ち上がって仏壇の向かいの襖を見ていました。

「由希子ちゃん、何うしたんだい？」

彰一兄さんも、怪訝な顔で云いました。お人形さんのように整った顔立ちの由希子ちゃんは、その瞳も硝子玉であるかのように、どこかこの世ならざるものを映しているようでした。

「また、女の人が居るの」

由希子ちゃんはそう云って、部屋の奥を指さしました。私と彰一兄さんは驚いて顔を見合わせます。普通であれば、そんな怪談めい

た話に取り合う筈ありませんが、なんせ通夜を終えた夜。傍らには母の遺体が眠っています。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められているかと思うと、いくら白痴の姪っ子が口にする戯れ言とは云え、笑い飛ばすことは出来ませんでした。死霊がさらに靈魂を呼び寄せたのか、それとも霧乃宮家には私たちの与り知らぬ死体がまだ埋められているのか。本当に、脈々と続いてきた家系などというものは、ろくなものではありません。

由希子ちゃんは何かに誘われるように、部屋の襖を開け、ゆらり、ゆらりと歩いてゆきます。

「ちよつと、由希子ちゃん」

彰一兄さんも立ち上がり、彼女の後を追います。私は手燭の蠟燭に火を灯し、慌てて二人を追いました。由希子ちゃんを無理矢理連れ戻そうかと思いました、何故かそうすることは躊躇われました。

それは彰一兄さんも同じのようで、まるで由希子ちゃんに導かれるように後をついてゆきます。

「兄さん、何か見える？」

私は声を潜めて問いを發しました。

「いや、何も」

答えは短く、目は前を見据えたままです。私たちは口も効かず、暗い廊下をゆっくりと歩いてゆきました。床板の軋む音だけが、闇に響きます。手燭の炎に照らされる兄の顔は蒼白でした。おそらく、私の顔も死人のように蒼褪めているのでしょうか。まるで私たちが、霧乃宮家を徘徊する幽鬼のようです。

由希子ちゃんが向かうのは、先程と同じ家の奥、かつて使用人の住まう部屋が並ぶところのようでした。そこは三畳の狭い部屋が三つ続いており、由希子ちゃんが足を止めたのはその真ん中の襖の前でした。果たしてここに何が居ると云うのでしょうか。激しい喉の渇きと、全身が粟立つのを感じます。

しかし、私の恐怖をよそに、由希子ちゃんは何の躊躇いもなくその襖を開けました。

思わず目を背けます。

「香奈恵……！」

彰一兄さんが私の手を取りました。

「大丈夫、誰も居ない。いや、居る筈ないじゃないか」

その言葉を聞き、私は恐る恐る目を向けました。澱んだ空気に、饅えた臭いが混じっています。手燭が照らすその部屋は何もなく、彰一兄さんが云うとおり、誰かが居るわけでもありません。由希子ちゃんが足を踏み入れたので、仕方なく私たちも後に続きます。三畳間のそこは、大人三人が入れば息苦しさを感じるほどの狭さでした。

「由希子ちゃん、ここに何があるんだい？」

彰一兄さんが、幼い子供に話しかけるように由希子ちゃんに問いかけます。由希子ちゃんは無言で、壁の一部を指さしました。私はつられて、その方に手燭を掲げます。暗がりには映し出される白壁は、何となく染みで汚れているようですが、それ以外に変わったことはありません。

「何があるの？」

私は眉をひそめました。

「何もあるわけが……」

云いかけて、彰一兄さんは鋭く息を吞みます。

「こ、これは——！」

何かに気づいたのか彰一兄さんの口から驚愕の声がもれました。壁を指さす手が震えています。私は意味がわからず、さらに一步進み出て目を凝らしました。

しかし次の瞬間、その正体に気づいた私は、衝撃のあまり危うく手燭を落とすところでした。

「な、何なの。これは……」

その問いに答えられる者は誰も居なかったでしょう。壁に浮かぶいくつもの染み。

おお——！　しかし染みと思っていたそれは、一面に若い女性の

顔を描いていたのです！ 表情は苦悶に歪み、目は助けを求めるように私たちを見据えています。私も彰一兄さんも、蛇に睨まれた蛙のように身動きが出来ずにいました。

「伯父さん、叔母さん、助けてあげてよ」

壁に浮かぶ女性の気持ちに代弁するように、由希子ちゃんが私の裾を引きます。私は声を発することも出来ず、呆然と立ち尽くしていました。異様な寒気を憶え、齒の根も合わないほど震えています。

「香奈恵、行こう。ここに居るのは、まずい」

ようやく絞り出すように、彰一兄さんが云いました。

「由希子ちゃんも戻ろう、ね」

「でも、この人も助けてって云っているよ」

「大丈夫だから。さあ、行こう」

彰一兄さんは両手にそれぞれ私と姪っ子の手を引き、足早に部屋を出ます。私は必死に恐怖に耐えながらも、あの女性が追ってくるような気がして、何度も後ろを振り返りました。本当なら、とっくにこの家を出たかったのですが、母を一人残していくわけにはいきません。逃げる先は、同じ屋根の下の仏間しかありませんでした。私たちは転がり込むように部屋の襖を開けました。

しかし、そこで待ち受けていたものは――私は今度こそ、自分が発狂したのかと思いました。布団の上で、手を組んだまま永遠の眠りにつく母。なのに顔を覆っていた白い布は、まるで自らの意志で払いのけたとでも云うように、その胸元に落ちていました。そうして、あろうことか臨終の間際と同じ夜叉の形相で、仏間に戻ってきた私たちを睨んでいたのです。その目には相変わらず、憤怒の炎を宿して。

恐怖は限界を超えたのでしょうか。私は自分が絶叫を発していることにも気づかぬまま、その場で気を失ったのです。

第七話 魔窟の夜明け

「やあ。起きたのかい、香奈恵」

私が目を覚ますと、目の前には安堵したように笑う彰一兄さんの顔がありました。一瞬、自分がどこに居るのかわからなくなり、慌てて体を起こします。

見馴れぬ木目の天井と、麝香の香り。云わずと知れた、霧乃宮邸の仏間でした。

「ああ、大丈夫か？ まだ早いから、寝ていればいいよ」

隣で静かに寝息を立てている由希子ちゃんを気遣ってか、彰一兄さんは囁くように云って私を押しとめます。

「私は……」

どうなったのでしょうか。事態を把握しようと、辺りを見回します。仏間の障子からはやわらかな陽が差し込み、雀の囀りが耳に届きました。どうやら気絶してそのまま朝まで寝入ってしまったようです。昨夜、恐ろしい顔で私を睨んだ母の顔には、再び白い布が掛けられていました。果たして今も、布の下では悪鬼の形相を呈しているのでしょうか。気にはなりましたが、それを確認しようとは思いませんでした。小さな祭壇に目を向けると、位牌の前で焚かれる蠟燭と線香は火を絶やしていません。彰一兄さんが一晩中仏の守りを務めて呉れたようです。

「吃驚したよ。部屋に戻ったら、突然倒れて仕舞ったから。前日も徹夜だっただろうし、きっと疲れていたんだな」

彰一兄さんは、明るい口調で云いました。私は気を失う前後のことを思い起こします。由希子ちゃんに誘われるままに屋敷の奥へと行き、そこで見たもの。そして、戻ってきたときの母の顔。思わず身震いしたのは、朝の冷気の所為ではありませんでした。

「ねえ、兄さん。あれはなんだったのかな。あの女の人はいったい――」

脳裏には、何かを訴えようとする女の顔が今も焼き付いています。

「香奈恵」

彰一兄さんはやつれた顔に、泣くとも笑うともつかぬ表情を浮かべて私を遮りました。

「考えない方がいい。——昨日は疲れていたんだよ。あの部屋には誰も居ない。居るわけないじゃないか」

「でも、兄さんだって見たでしょう。壁一面に浮かぶ女の顔を。私だって悪い夢だと思いたいけど、矢っ張りこの屋敷には何かあるのよ」

「……」

今度は彰一兄さんが黙る番でした。「霧乃宮家にある何か」——庭に埋められた父、竜三の憤怒と、仏間に横たわる母の狂気が呼び寄せた悪霊は、いくら否定しようとも確かに屋敷の中に居るのでした。

「私、もう一度見てくるわ」

障子から差し込む朝の光が、私を奮い立たせました。魑魅魍魎の跋扈する夜は終わり、霧乃宮家に今居るのは、生ある者だけの筈です。私が生まれ育った屋敷に他人が土足で踏み上がられるのは、例え幽霊であれ我慢がなりません。私は布団を払いのけて立ち上がると、縁側に出る障子戸に手を掛けました。

「香奈恵！」

その瞬間、彰一兄さんは私の手を？み、再び引き留めました。

「誰も居ない。俺が確認したんだ。あの部屋はもちろん、屋敷の中に居るのは、俺たちだけだよ。だから、香奈恵が行く必要はない」

「兄さん……」

かれは、なおも何かを隠しているのでしょうか。私を見据える目は、これ以上追求しないようにと必死に懇願していました。父の殺害さえ打ち明けて呉れた彰一兄さんが、今さら何を隠す必要があるのか。相当に訝しみましたが、どうやら力づくでも私を押し止める積もりのようです。

「わかった。兄さんがそう云うのなら間違いないわね」

私は力なく溜め息をつくど、兄の手を振りほどきました。もちろん、その言葉どおり納得したわけではありません。ただ、今はその理由を聞いても、かれは何も話して呉れないでしょう。

「済まない、香奈恵……」

彰一兄さんは安堵したように息を吐き、ここに来てから何度目かになる謝罪の言葉を口に出しました。

「もういいわ。きっと私の見間違いなのだろうし。それより、由希子ちゃんを起こして今日の準備をしておかないと。すぐに近所の方も集まってくるわ」

十九歳という立派な娘である筈の由希子ちゃんは、まるで純真無垢の赤ん坊のように安らかな顔で寝息を立てていました。昨夜のことは、まるで意に介していないようです。白痴である由希子ちゃんの目には、この世の者もあの世の者も、区別なく映るのでしょうか。生きることはあまりに辛く、いつか訪れる死は幸福の安らぎになるであろう彼女にとって、生と死の境界はあやふやなのかも知れません。

私は何となく姪っ子が不憫に思え、夢の世界から引き戻すのを躊躇いました。

そんな時、帝都の静寂を打ち破るように、遠くから自動車の音が聞こえました。やがてそれは、霧乃宮邸の前で止まります。私と彰一兄さんは顔を見合わせ、障子を開けて表を見やりました。門の前に停まっているのは、一台の黒塗りのオースチンでした。

「亮平義兄さん？」

中から出てきたのは、まぎれもなく亮平さんです。まだ珍しい黒の洋装にステッキを持つその姿は、まるでキネマ館のスクリーンに映し出された弁士のようにでした。

「もう来たのか……」

予想外に早い来訪に、彰一兄さんも驚きの声を上げました。

「早く由希子ちゃんを起こさないと。——由希子ちゃん、起きて

頂戴。お父様がいらっしゃったわよ」

つい先ほどは眠りを妨げることを躊躇いましたが、もうそんなことは云っていられません。私は勢いよく布団をめくると、寝ぼけ眼の由希子ちゃんを引き起こしました。

「お父様よ。さア、お顔を洗っていらっしゃい」

今まで寝ていたことが知られば、またどんな嫌味や折檻が待ち受けているかわかりません。取り敢えず由希子ちゃんを部屋の外に出し、慌てて布団を押し入れに仕舞い込みます。

亮平さんが入ってきたのは、なんとか場を取り繕った直後でした。

「お早うございます。朝早くからご苦労様です」

亮平さんが入って来るなり、彰一兄さんは畳に手をついて頭を下げました。まるで主人を迎える使用人のような態度です。一方の亮平さんは、尊大な態度で睥睨していました。この場合、亮平さんも座して畳に手をつき、挨拶を交わすのが礼儀ではないでしょうか。一瞬怒りを覚えました。彰一兄さんがちらりと目線で咎めるのに気づき、私も仕方なくそれに習いました。

「お早う。彰一君と香奈恵ちゃんこそご苦労だったネ。一晚中、仏の守りとあつては一睡もできなかっただろう」

「いえ、お義兄さんにはお世話になりっぱなしで。私にはこれぐらいしか出来ませんから」

彰一兄さんは畳に頭を擦りつけんばかりにして云いました。本来なら、いくら歳上といえど、妹の旦那である亮平さんを「お義兄さん」と呼称する道理もあります。もちろん、それは承知の上での意図的なものでしょう。霧乃宮家を捨てた負い目が、自らを卑下させるのかも知れません。

しかしそれは、亮平さんの気に入るようでした。自尊心を満足させたときの癖である鼻の穴をひくつかせながら、恰幅の良い体を揺すります。

「今さら遅いかも知れないが、彰一君にとっては最後の親孝行だったネ。きつとお母様も喜んでおられるよ。長年会えなかった息子

と、ゆっくり一晩過ごせたのだから」

「亮平さん！」

たっぷりと嫌味を含んだ言葉に、私は思わず憤慨しました。しかしそれさえも、彰一兄さんは私の裾を？み、首を振って諫めます。

「お義兄さんには感謝しております。母の最期を看取っていたいたこと、勝手に出ていった私にも、葬儀の参列をお許しいただいたこと。本当に、なんとお礼を申し上げればよいか……。不甲斐ない私の所為で、ご迷惑をおかけしました」

「なに、義理とはいえ子が親の面倒を見るのは当然のことだ。だいたい、霧乃宮紗江子ともあろうお方が孤独な死を遂げたとあっては、世間様に示しがつかない。それに、親戚筋にある私にとっても名折れだからネ。何も案ずることはないよ。今後のことは、すべて私が取り仕切るから。彰一君だって、自分の生活があるんだ。今さら霧乃宮家のことで、頭を悩ませたくはないだろう？」

極めてもの柔らかな云い方ではありましたが、それは「霧乃宮家の権利は自分のものだ。誰にも口は出させない」という云い条に他なりませんでした。

「そう云っていただければ幸いです。凡庸な私では、今後どうすればいいのか見当もつかず、途方に暮れていましたので。これ以上お世話になるのも心苦しいのですが、どうかよろしく願います」

「乗りかかった船だからネ。安心し給え、霧乃宮家の名を辱めるようなことはしないから」

私は頭を下げたまま、体をわなわなと震わせていました。唇を噛みしめる顔は、蒼白だったに違いありません。矢張り亮平さんの狙いは霧乃宮家の財産だったのです。彰一兄さんはそれをわかっていながら、どういうわけか、いとも簡単に手放して仕舞いました。

「ところで、玲子は？　一緒にいらっしゃったのではないのですか？」

彰一兄さんは平伏したまま、亮平さんを見上げて問いを發しました。

「ああ、取り敢えず私が一番に居ないと格好がつかないだろう。あいつは後から、ハイヤーでやってくるよ。それにしても……えい、ここは線香臭くてかなわん」

本当に嫌でたまらないと云いたげに鼻に皺を寄せ、亮平さんは仏間を出てどこかへ歩いてゆきました。亮平さんの姿が見えなくなると、私は思わず溜め息をつき、ゆっくりと立ち上がりました。

「兄さん、これで良いの？」

良いわけはありませんが、聞かずにはいられません。

「お母ちゃんがずっと守ってきた屋敷が、亮平さんに取られちゃうんだよ。兄さんが一言、『渡さない』って云えば、家は残るかも知れないのに。多少のお金なら聡太郎さんに——夫に頼めば工面できるから……だから、私たち兄妹で家を守っていこうよ」

私は悔しさと悲しさのあまり、涙を浮かべていました。これでは母も浮かばれません。しかし、彰一兄さんは私の言葉にも首を縦には振りませんでした。

「もういいよ。屋敷を残したところで、誰かが住むわけじゃないし。俺は戻ってくる積もりはないんだ。それに、おふくろが守ってきたのはこの屋敷ではない」

私は眉根を寄せて兄を見ました。

「それは、どういう意味？」

「いや、つまり……。兎も角、悪いようにはしないから。霧乃宮の者として、ちゃんと責任は取る積もりだ」

「……？」

彰一兄さんの言葉に、私はますます首を傾げました。かれは何を知っているのでしょうか。そうして、何を企んでいるのでしょうか。聞きたいことは山ほどありましたが、それ以上彰一兄さんを問い詰めることは出来ませんでした。

——責任は取るつもりだ。

その意味はわかりませんが、彰一兄さんは何かしらの考えがあるようです。今まで気づきませんでしたでしたが、口元を引き結んだ意志の

強さを表す顔は、亡くなった母にそっくりでした。

彰一兄さんを招いたのは私でしたが、ひよっとしたら母の導きだったのかも知れません。私はもう何も云わず、今日の葬儀の準備に取りかかることにしました。

葬儀自体を取り仕切るのはご近所の「お取り持ち」ですが、かれらは葬儀が終わった瞬間に「お客様」へと変貌します。二日間の労をねぎらい、持て成すのは、私たち親族の役目です。

私は下準備をする為、彰一兄さんを仏間に残して台所へと向かいます。その途中、廊下ですれ違ったのは、先ほど部屋から追いやった由希子ちゃんでした。若い娘ならではの、艶やかな黒髪に白い肌。大きな瞳は純真無垢を表すかのように澄み渡り、口元にはあどけない笑みを浮かべていました。つられて、私も思わず？がゆるみます。

「由希子ちゃん、お早う。目が覚めた？　お婆ちゃんのお部屋に戻って、ちよっと待っていてね」

子供と同じような言葉で大の大人に云い含めるのは、どうにも違和感があります。しかし、次に由希子ちゃんの口から発せられたのは、返事とはまったく別のことでした。

「昨日の女の人、お父様とお知り合いなのかな？　お父様は女の人が居る部屋に入っていったわ」

「え……？」

思いがけぬ言葉に、私は驚愕しました。夢か現か、昨夜現れた壁一面に浮かぶ女人の顔。何の用があるのか、亮平さんはあの部屋に足を踏み入れたと云うのです。

「それ、本当なの？」

「うん。でもね、お父様は『由希子はあっちに行ってなさい』って云うの。私ももう一回あの人に会いたかったんだけどな。ねえ、あの人は大丈夫だったのかな？」

確か由希子ちゃんの話では、女人は助けを求めていたと云うのです。いったいあの女は誰なのでしょう。そして、何から逃れようとしていたのでしょうか。見知らぬ彼女もまた、霧乃宮家の呪いによ

ってこの世にとどまっているのかも知れません。

私は由希子ちゃんに仏間に戻るように告げ、亮平さんが入っていたという例の部屋へと向かいます。彰一兄さんとの約束を忘れたわけではありませんが、矢張り昨夜のことが気になって仕方がなかったのです。彰一兄さんは何を知っているのでしょうか。そして、亮平さんがあの部屋に何の用があるのでしょうか。私は嫌な予感にせかされるように、足早に廊下を進みました。すでに夜は明けた所為か、屋敷の中を彷徨う悪霊とすれ違うこともありません。

しかし、その代わりにばったり出くわしたのは、ちょうど襖を開けて出てきた亮平さんでした。

「香奈恵ちゃん」

「亮平さん……」

私たちは同時に驚きの声を発しました。

「何うしたんだネ、こんなところで」

亮平さんは、さも奇遇だと云わんばかりに訊ねました。その顔は一見、喜色を浮かべていますが、私を見る目はこの場から追いやろうとする小昏い瞋恚の炎に燃えています。

ここは霧乃宮邸。あとから思えば、屋敷の中において私が気を遣うことは何ひとつない筈です。しかし、命令し馴れた亮平さんの高圧的な態度に、私はつい萎縮して仕舞いました。どう言い訳をすればいいのでしょうか。一瞬、狂気のように頭脳を回転させます。

由希子ちゃんの見たものや昨夜の出来事を話しても、亮平さんは馬鹿馬鹿しいと一蹴するだけに違いありません。また、普段から由希子ちゃんの虚言を快く思っていないかれのことです。幽霊騒ぎを正直に話したところで、由希子ちゃんが折檻を受ける火種を作るだけでした。

「いえ、今日の精進落としての用意をしようと台所に来たのですが、何やら物音が聞こえたもので……亮平さんだったのですね。安心しました」

私はそう云って、無理矢理笑って見せました。

「ああ、驚かせて済まなかったネ」

「ところで、亮平さんこそ何うしてこんな部屋にいらっしゃったのですか？　ここは以前、使用人が寝起きしていた部屋です。使われなくなって随分経つのですが、何かありました？」

昨夜の出来事は伏せ、「ふと疑問に思った」という風を装って首を傾げます。

「いや、ついに霧乃宮邸も住む者が居なくなっただかと思うと、何やら感慨深いものがあってネ。というろろとこんな所まで来て仕舞ったんだよ」

「そうでしたか……祖父が健在だった頃はまだ多くの使用人を雇い、賑やかな屋敷だったのですが。何だかもう、遠い昔のように思えますね」

私はさも共感したかのように、しんみりと云いました。どうせ、霧乃宮邸を値踏みしていたのに違いありません。ここが幽霊屋敷だと知れば、亮平さんは何と云うのでしょうか。手に入れるのを、諦めて呉れるのでしょうか。しかしそれは、私の口から告げることでありませんでした。

「そうだね。随分、昔の話だ」

亮平さんの相づちは、どうでもいいと云いたげでした。

「忙しいのに悪かったネ。食事の準備をしなければいけないのだろう？　じきに玲子も来るから、手伝わせることにしよう」

それは、この話はもう終わりだという合図に他なりません。私は作り笑いを浮かべて軽く会釈すると、踵を返して台所へと向かいました。背中には、射抜かれるような視線を感じます。それが亮平さんのものなのか、それとも別の誰かなのか、確かめる勇氣はありませんでした。

第八話 陽炎は春の火刑の焼け野原

『あらたふと青葉若葉の日の光』

母、霧乃宮紗江子の葬儀が行われたのは、思わず芭蕉の俳句を連想させるさせるような、さわやかで清々しい春の日でした。

いつもなら心が浮き立つ春霞の空ですが、悲しみに暮れる葬儀とはどこまでもそぐわず、まるで私たちの慟哭を嘲笑うかのようでした。

小鳥の囀りは、父、竜三の哄笑でしょうか。それはただ、禍々しい凶兆に思えて仕方ありません。色鮮やかである筈の桜も霧乃宮家の最期を嘆いているのか、色を無くしているようです。いつも縁側から眺めていた母の目には、今日の桜は何色に映るのでしょうか。

霧乃宮紗江子の遺骸は棺に収められました。白い棺を載せた葬送の列は、春の陽炎が揺らめく灰色の帝都を歩き、野辺へと向かいます。私も、彰一兄さんも、玲子姉さんも、そして亮平さんも、それぞれの思惑を胸に秘め、神妙な面持ちで歩いていました。ただ、由希子ちゃんだけが、意味もわからぬ行列に、嬉しそうについてきます。

もうじき終わるこの葬儀の後、亮平さんは本性を現すのでしょうか。かれの狙いはいったい何なのか、彰一兄さんにはわかつているのでしょうか。蒼白の顔からは、何も読み取ることはできません。

黙々と歩く私たちは、やがてうら寂しい原っぱへとやってきました。いえ、本来ならば、ここは芽吹いた草がそよ風になびく、心地よい場所なのです。今日も、花開いた小さな草花は静謐な微風に揺らいでいました。どこか厳かな空気が漂うのは、目の前で大きな井桁に積み上げられた薪のせいです。それはまるで浄土へと続く扉のようで、黄泉に旅立つ死者をじっと待ち受けています。ここは、死者を火葬する荼毘所でした。

経の詠唱の中、母の入った棺は井桁の上に載せられます。火が入

れられ、ゆらゆらと空に立ち昇る黒い煙。やがて燃え広がる紅蓮の炎は、白い棺をあつという間に飲み込んでゆきました。目の前で、母の骸を焼く。――それは何と残酷な光景なのでしょう。

「おふくろ！」

彰一兄さんは、焼かれる母を目の前にして地面に泣き崩れました。頬を伝う滂沱の涙には、いったいどれほどの後悔と悲しみが滲んでいるのでしょうか。嗚咽は風に乗り、遙か天までも届くかに思われます。

しかし、私はそれをどこか他人事のような思いで見つめていました。どういふことか、涙が出てきません。

風に漂う焼けた肉の臭い。さらに勢いを増す炎の中で、霧乃宮紗江子が焼けぼっくいになってゆく様子が見て取れます。凍り付いたままの夜叉の如き形相は、もう見る影もありません。？は溶け、舌を焼き、鼻腔は黒煙を吹いていることでしょう。眼球は眼窩を抜け落ちて地面にこぼれ、呪詛と憤怒に沸き立つ血は地獄の業火となって天を焦がします。

焼けてゆく――

お母ちゃんが焼けてゆく……

私は数珠を持つ手を合わせたまま、恍惚感さえ憶えて燃えさかる炎を見ていました。そうして、霧乃宮紗江子の人生を思います。脈々と続いた旧家の末裔。ただその血を守るためだけに竜三を婿に迎えて、私たちを生み、やがていつの間にか鬼となったのです。

父、竜三の死体は、今も冷たい土の中に眠っています。屋敷には、誰とも知れぬ霊が徘徊しています。没落の旧家は魔物の住処です。

滅んでしまえばいい。何もかも――。

私は心より願いました。古くから続く血脈などろくなものではありません。代を重ねるごとに濁ってゆく血と頹廢の家系が、母を魔物に変えたのです。私は自分が霧乃宮家の血を受けていることを呪いさえしました。

そんな私を咎めるかのように、薪は突然激しい音を立てて崩れ落

ちました。母の遺体はまだ焼き上がってはおらず、赤黒い塊となつて灼熱の炎に包まれています。辺りには、吐き気を催すほどの異臭を撒き散らして。既に判別のつかない炭と化した顔が、私を見ていると感じたのは気のせいでしょうか。燃えさかる炎を前に、悪寒が走ります。私は目を瞑って手を合わせ、必死に母の成仏を祈るのです。

茶毘に付された母の遺骨を持ち帰り、葬儀を取り持って呉れた近所の方々を持て成すと、ようやく霧乃宮紗江子の葬儀は終わりました。

これで何もかも片付いたと云わんばかりに、気の抜けた様子の親族だけが残っています。親族とは云っても、私たち兄妹三人と亮平さん、そして由希子ちゃんだけではありませんが。皆、疲れ果てた表情で座敷に腰を下ろしたまま、何をするでもなく黙り込んでいました。

その沈黙に堪えかねたように、玲子姉さんは溜息混じりに口を開きました。

「ようやく終わったわね」

さもうんざりだと云いたげな口調です。

「こんなこと云うのは何だけれど、私、お母ちゃんが死んで呉れてほっとしているのよ」

「姉さん、なんてことを！」

姉の言葉に私は耳を疑い、思わず立ち上がりました。母が亡くなったというのに、何という言い種でしょう。

「お母ちゃんが亡くなったのが、そんなに嬉しいの？」

「そりゃあ、あなたたちは何をするでもなかったでしょうし」

玲子姉さんはそう云って、私と彰一兄さんを睨め付けました。

「この二年間、同じ屋根の下に居るといっただけでうんざりだったわ。いくら離れに押し込めたと云っても、お母ちゃんたら、気がつくといつもジツとこっちを見ていて。まるで四六時中監視されて居

るみたい。こんなこと、いつまで続くんだろうって」

玲子姉さんの口調は、毒々しい呪詛に満ちていました。ずっと母を嫌っていた玲子姉さん。親が死んだ悲しみより、積もり積もった憤懣が溢れてくるようでした。

「やめないか、玲子」

「あなたの所為で！」

なだめようと肩に置いた亮平さんの手を、激しく払い除けます。

「あなたがお母ちゃんを引き取るなんて云うからこんなことに。

私は絶対嫌だって云ったじゃないの！」

「今さらそんなことを云ったって仕方がないだろう。それに、お母様は亡くなったんだ。死んだ人を悪く云うものじゃない」

亮平さんは、うんざりしたように云いました。そのやり取りを見かねたように、彰一兄さんは姿勢を正して平伏します。

「済まない、玲子。俺の所為で迷惑を掛けて。——亮平義兄さんには、本当に何とお礼を申し上げて良いか」

「ああ、もういいよ。これで全て終わったことだからネ」

彰一兄さんに対する言葉も、本当にもうどうでもいいと云いたげでした。

「それより彰一君、今朝も云ったことだが、この霧乃宮家のことは私にまかせて呉れるネ」

「亮平さん、それは……」

引き留めるのはこれが最後だと、私は思わず口を挟みます。

「それはもう少し待って呉れませんか？ 屋敷を何うするかは、私たち兄妹でちゃんと話し合いたいのですが」

「香奈恵ちゃん、身寄りのないお母様を引き取って最期を看取ったのは私だからネ。霧乃宮家を何うするのか、一番の決定権があるのは私だよ。そうは思わんかネ」

「そんな……」

穏やかだけれども有無を云わせぬ口調で云って、私を睨みます。その鋭い眼光に射すくめられ、私はたじろぎました。

険悪な雰囲気の中、彰一兄さんが無言で裾を引きます。振り向くと、かれは目配せで私を追いやりました。

「大丈夫だよ。何もすぐにこの屋敷を売る積もりはない」
安心させるような、亮平さんの言葉。

「……」

いったい亮平さんはこの屋敷を何うする積もりなのでしょう。私は亮平さんの意図を？みかね、彰一兄さんを見ました。しかし、彰一兄さんはそんな私を無視し、落ち着き払って深々と頭を下げます。「そうしていただけると助かります。今朝も申しましたが、私はもう、この家に戻ることはありませんし、どちみちこんな大きな屋敷を切り盛りする甲斐性もございません。どうぞ亮平義兄さんの意のままに」

それを聞き、亮平さんは満足そうに頷きました。喜んでいるのか、鼻の穴が広がっています。

「ただ――」

彰一兄さんは言葉を継いで頭を上げ、亮平さんを正面から見据えました。

「何だネ？」

「ただ、母の遺品の整理をしたいと思います。着物などもまだ多少残っておりますし、兄妹でそれらを形見分けしたのちということでもよろしいでしょうか？」

「ああ、そんなことか。構わんよ。ゆっくりやって呉れたらいい」
「それから」

まだあるのかと云いたげに、亮平さんは眉根を寄せます。

「最後に、今夜は私たちが生まれ育ったこの屋敷で、昔を懐かしみながら一晩を過ごしたいと考えております」

「え？」

私と玲子姉さんは、異口同音に驚きの声を上げました。そんな話は聞いておりません。もちろん玲子姉さんも同様のようです。

「それはまた――突然だネ」

亮平さんは何と答えようか迷うように、唇を湿しながら云いました。

「私は……」

急な話に、玲子姉さんも私と彰一兄さんを見比べ、戸惑いの表情を浮かべています。

「いいじゃないか、最後ぐらい。おふくろだって、もう一度この家に兄妹がそろったところを見たいだろう」

「兄さんに云われたくないわ!」

「姉さん、いいじゃない。本当に、これで最後なんだし。もう兄妹三人がそろうことなんて無いかもしれないんだよ。ねえ、私からもお願い」

私は幼い頃からそうしてきたように、末っ子の役目として二人の仲を取り持ちました。彰一兄さんの意図はわかりません。しかし、私はかれの言葉を信じることにしました。

（兎も角、悪いようにはしないから。霧乃宮の者として、ちゃんと責任は取る積もりだ）

玲子姉さんは、「今さらこんな屋敷で寝たくない」だの、「兄さんと話すことなど何もない」だのと文句を云っていましたが、最終的には渋々ながら承諾して呉れました。

「よろしければ、亮平義兄さんも一緒にどうですか?」

社交辞令の積もりなのか、彰一兄さんは亮平さんにも滞在することを勧めました。しかし、亮平さんは苦笑混じりに首を振ります。

「いや、折角の兄妹水入らずだからネ。私は遠慮しておこう」

そう云って、そそくさと立ち上がります。話が決まれば長居は無用とばかりに、早くも帰るようでした。

「私は泊まっていく」

当然というように、由希子ちゃんは嬉しそうに宣言します。私と彰一兄さんは、笑いながら頷きました。最後の霧乃宮邸に泊まるのは、どうやらこの四人のようです。

私たちは亮平さんを見送るため、外に出ました。亮平さんは来た

ときと同じ、黒塗りのオースチンに乗り込み、窓から顔を出します。

「それじゃあ、失礼するよ」

「本当に、お世話になりました」

私と彰一兄さんは感謝の意を伝え、深々と頭を下げました。

「彰一君、あとはよろしく」

云い残して、兄を見る亮平さん。その目には、恫喝の色が浮かんでいたような気がします。冷酷で、どこか猛禽類を思わせるような目つきでした。ぞっとする私をよそに、亮平さんを乗せたオースチンは、土煙を上げながら帝都を去ってゆきます。私たちは孤島に残された者のように、小さくなる自動車をいつまでも見ていました。

湿った、生暖かい風が？を撫でます。変わりやすい春の空は、いつの間にか灰色の雲に覆われています。どうやら再び嵐が吹き荒れるようでした。

振り向いて目に映るのは、鬱蒼とした大きな屋敷。怪しげな旧家からは瘴気が立ち上るようで、どこか落ち着かない胸騒ぎがします。それは、これから訪れる本当の恐怖の始まりでもありました。

第九話 霧乃宮一族の滅亡？

亮平さんを見送ってから屋敷に入ると、やがて降り出した雨が屋根を叩く音が聞こえました。吹きつける風は激しく、庭の木々がざわめいています。それはまるで、死人が出た家に呼び寄せられるという悪鬼の咆哮のようで、不気味に鳴り響く風音は、私たちを落着かない気分にさせました。

「雨戸を閉めた方がいいかな」

彰一兄さんの言葉に、私と玲子姉さんも立ち上がります。

外はまだ日暮れ前だというのに、厚く垂れ込めた雲の所為でずいぶん暗くなっていました。

折角満開になった庭の桜に、心ない嵐が吹き荒れます。激しく舞い散る桜花。しかし、散りてなお、花はいっそうあでやかに色を増すかのようです。それは、土に埋められた竜三の血の色でしょうか。木の根が吸い上げた血の所為で、花は見事に染まるのでしょうか。嵐の中に散りゆく桜は悲しいほどに美しく、私は思わず呆然と立ち尽くして仕舞いました。

と、その時、濡れる桜の木の下に、一瞬、白い布がひらりと舞います。

「あ——」

しかし次の瞬間には、それは幻のごとく消え去りました。鬼——でしょうか？ 昨日も見た、魂を喰らう白装束の鬼。

「何うしたの、香奈恵ちゃん」

思わず発した声を聞き、玲子姉さんが怪訝そうに眉をひそめます。

「いえ、何でもないわ」

私は慌てて答えると、鬼が入ってこないことを祈りながら雨戸を閉めて廻りました。

霧乃宮邸は差し込む光もなく、一足先に闇が訪れます。座敷に集まった私たちを照らすのは、頼りなげな小さな洋燈でした。

「何年ぶりだろうね。こうして兄妹三人がそろうのは」

彰一兄さんは嬉しそうに云いました。

「二十年ぶりぐらいかしら。昔は賑やかで楽しかったね。お母ちゃんも、お爺ちゃんもいて。住み込みで世話をして呉れたマサさんだっけ。元気にしているのかな」

『お父ちゃん』を入れなかったのは意図的でした。姉さんが昔のことを詮索しないとも限りません。しかし、玲子姉さんは私の話など聞こえぬように、どこか落ち着かなげでした。

「姉さん？」

私の呼びかけに、はっとして顔を上げます。

「そ、そうね。元氣かしらね」

返ってきたのは、上の空の答えでした。何が気になるのか、玲子姉さんは雨戸を閉め切った縁側にしきりに目を向けます。つられるように、私と彰一兄さんもそちらを見やりました。

誰かが居るわけではありません。ただ、激しく降りつける雨音だけが聞こえてきます。それとも、土の中から甦った父が、白骨の拳を握りしめて戸を叩いているのでしょうか。春嵐の中、雨に濡れた髑髏が、舌の抜けた顎をカタカタと鳴らしているようです。

もつとも、玲子姉さんは父が庭に眠っていることなど知る由もありませんが。

私は戦慄を憶え、思わず目を背けました。

折角の団欒の場に、白けた空気が漂います。彰一兄さんも玲子姉さんも、どこか所在なげで居心地が悪そうです。

それにしても彰一兄さんは、何うして急に兄妹三人で一夜を過ごすなんて云い出したのでしょうか。その意図は？みかねないものがありました。

「ねえ、お婆ちゃんが居るよ」

突然、そう云って部屋の片隅を指さしたのは、またも由希子ちゃんでした。思わず全員の目がそちらに向けられます。しかし、もちろんそこに母の姿はありません。少なくとも私の目には何も映りま

せんでした。

「由希子、脅かさないで頂戴。お母ちゃんが居るわけないじゃないの」

「居るよ。座ってこっちを見てるよ」

「由希子！」

玲子姉さんは蒼褪めた顔で叱りつけました。由希子ちゃんは涙目で俯き、口を閉ざして仕舞います。

「何なの……この家には、何か居るの？」

苛立った口調で呟く玲子姉さん。矢張り姉さんも何かを感じるのでしょうか。しかし、その問いに答える者はいません。彰一兄さんも黙ったまま、陰鬱な表情で俯きます。洋燈に照らされるかれの横顔は蒼白でした。

ああ——由希子ちゃんの目には、いったい何が見えるのでしょうか。母の魂は、まだこの屋敷を彷徨っているのでしょうか。云われてみれば、母の気配を感じなくもありません。

「お母ちゃんは、何が心残りだったんだろう……」

「決まってるじゃない」

つい、口をついて出た私の疑問に、玲子姉さんはすかさず答えました。

「兄さんを恨んでいるのよ」

決めつけて、彰一兄さんを指さします。

「姉さん、それはもう終わったことだから……」

しかし、なだめる私の言葉は、姉さんの耳に入らぬようでした。

「兄さんさえ出ていかなければ、お母ちゃんはずっとここに居られたのに。そうすればあの人だって、お母ちゃんを引き取るなんて云い出さなかっただろうし、私がこんな苦勞をすることもなかったわよ」

また始まった姉さんの繰り言を、私はうんざりした気持ちで聞き流していました。思えば昔から、姉さんは愚痴っぽく、僻み根性の強い人でした。胸の内はどうあれ、不平不満など一度も聞いたこと

のない母とは正反対です。

「おふくろの心残りは、俺じゃないよ」

云い止まぬ玲子姉さんを遮り、彰一兄さんは口を開きました。

「俺じゃないんだ……」

自分に云い聞かせるように、繰り返します。

「何うしてそんなことがわかるのよ。二十年間、一度も顔を見せなかったくせに！」

叩きつけるような激しい口調で、玲子姉さんが詰め寄ります。

「お母ちゃんの事なんて何も知らないくせに。兄さんへの恨み言じゃないなら、何だと云うの！」

姉さんの詰問に、彰一兄さんはどう答えようか考えるように唇を噛みました。かれの視線が、ちらりと座敷の片隅に向けられます。まるで、そこに居る母を気に掛けるように。

「もう、云ってもいいだろ？」

それは、誰に向けて発した言葉でしょうか。答えを待たず、彰一兄さんの目が私たちを見据えます。

「おふくろが案じていたのは、ただ霧乃宮家の名誉でしかない」

「……？」

意味がわからず、私と玲子姉さんはぽかんと口を開けたまま絶句しました。彰一兄さんの云うことは、あまりに漠然としています。

「どういう意味？」

何かを察したのか、玲子姉さんは先程とは打って変わった静かな口調で訊ねました。

「『赤マント』は知っているか？」

彰一兄さんの話は、どこに向かっているのでしょうか。私と姉さんは、互いに怪訝な顔を見合わせます。

『赤マント』——それは、このところ新聞を賑わしている、帝都に出没する誘拐犯のことでした。裏地が真っ赤なマントを羽織り、若い女性ばかりをかどわす。しかも連れ去られた女性は、誰ひとり見つからないのです。

「もちろん知っているわ」

姉さんの答えに、私も頷きます。

「それじゃあ、『赤マント』の正体が亮平さんだとは？」

「――！」

一瞬、彰一兄さんの云っていることが飲み込めず、私と姉さんは言葉を失いました。

「何を……云っているの……？」

泣くとも笑うともつかぬ顔で、玲子姉さんは云いました。私も同感です。いったい、何を根拠にそんなことを。

「非道いじゃないの！ 葬儀の喪主を立ててもらえなかったことを逆恨みして、そんなことを云うなんて！」

玲子姉さんは立ち上がり、烈火の如く怒り狂いました。無理ありません。旦那を名指しで誘拐犯だと云われれば、憤慨しない方がおかしいでしょう。

しかし、彰一兄さんは黙ったまま、自らを落ち着けるように大きく息を吸い込みました。目の前に立つ玲子姉さんを見上げ、そのまま対峙するように立ち上がります。

「説明したところで納得しないだろ。ついてこいよ」

顎で障子の向こうを指し示し、手燭を取ります。今まで、どこかおどどしていた兄さんの顔は、何かを思い詰めたような面持ちでした。爛々たる眼光を放ち、口は真一文字に結ばれています。

私と玲子姉さんはその迫力に気圧され、云われるままに彰一兄さんの後に続きました。由希子ちゃんも何も云わず、当然のように一緒に続きます。

雨戸の閉められた、真っ暗な霧乃宮邸。闇の中を、兄さんが掲げる手燭ひとつを頼りに歩いてゆきます。風雨と轟く雷鳴はさらに激しさを増し、深い暗闇と相まって恐怖を憶えます。そんな私たちを嘲笑うかのように、踏みしめる床板は耳障りな音を立てて軋みしました。

やがて辿り着いたのは、昨夜、由希子ちゃんが導いた使用人の部

屋でした。

私は思わず唾を飲み込みます。ああ、矢張りここには、何かが隠されているのです。

「ここは？　——ねえ、この部屋に何があるの？」

再び苛立った口調で問う玲子姉さん。それに答えたのは由希子ちゃんでした。

「女の人がね、助けてって云っているんだよ」

玲子姉さんは、まるで恐ろしいものでも見るかのように目を見開きました。心なしか、唇が震えています。しかし、由希子ちゃんは相変わらずにここにこと無垢な微笑みを浮かべるばかりです。

「香奈恵、ちょっとこれを持っていて呉れないか」

彰一兄さんは私に手燭を渡しました。そうして、どうする積もりなのか、畳を持ち上げます。

「ちょっと、何をするの？」

しかし私の問いには答えず、彰一兄さんは三畳すべての畳を壁に立てかけました。すると今度は、畳の下にあった敷き詰められた古紙を払い除け、床板を剥がします。

「兄さん……」

意図が？めず兄を呼びかけますが、それさえも答えて呉れません。壁に屈折して映る影が、揺れる手燭の炎に合わせてざわめきます。呆然とする私たちの前で、ついにすべての床板が剥がされると、床下には地面の土が露わになりました。気のせいかな、何となく湿っぽく、生臭い匂いがします。

「いい加減にして頂戴。こんなことをして、いったい何だと云うの！」

玲子姉さんは、ついに癩癩を起こして喚きました。無理ありません。これのどこが、亮平さんと『赤マント』を結びつける証拠になるのでしょうか。

すると、彰一兄さんは驚くべきことを云いました。

「ここに、死体が埋まってる」

「え——？」

私と玲子姉さんは、再び言葉を失いました。彰一兄さんの発した台詞は、まるで「ここに大根が転がっている」とでも云うような何気ない口調で、すぐにはその意味が理解できなかったのです。

驚愕する私たちをよそに、今度は彰一兄さんは暗い床下に降り立ちました。しばらく地面をまさぐると、どこにあったのか、その手には大きなスコップが握られています。

何となく、かれのやろうとしていることを察した私は、恐怖に体が硬直していることを感じました。

目の前で、土が掘り返されてゆく。私と玲子姉さんは知らず知らずに取り合ったまま、事の成り行きを見守っています。

最終話 霧乃宮一族の滅亡？

沈黙の中、突如轟く雷鳴――。

一掘りごとに猛烈な異臭が漂い、胸苦しさが増します。緊張と相まって、互いに握りしめる掌には冷たい汗が滲みました。

どれだけの時間が過ぎたのでしょうか。実際には、短い時間の筈です。彰一兄さんが掘り起こした土は、それほど多くはなかったのですから。彰一兄さんは掘るのをやめ、私を見ました。

「香奈恵、ここを照らしてご覧」

云われるまま、震える手で明かりを掲げます。土の中から出てきた、鑑のように白いもの。しかしそれはあまりにありうべからざるもので、一瞬、それが何かはわかりませんでした。先にその正体を知った玲子姉さんの口から、鋭い悲鳴が漏れます。次いで私もそれを理解し、思わず顔を背けました。

霧乃宮家の床下から出てきたのは、人間の手でした。腐り、所々朽ち果てた肉の合間から覗く白い骨。手は虚空を？むように天に伸び、指の先を蛆虫が這っています。目の当たりにしたのは一瞬なのに、あまりの衝撃にその映像はキネマのフィルムのように脳裏に焼き付いて仕舞いました。

「恐らく、行方不明になっている女性だろう。この部屋だけじゃない。屋敷の床下には、まだいくつかの死体が埋められている筈だ」

「何うしてこの事を？」

私は袖口で口と鼻を押さえて訊ねました。

「昨日、由希子ちゃんが見た幽霊。それを追ってここまで来たんだろう？ 香奈恵が気を失ったあと、俺は由希子ちゃんともう一度この部屋に戻ったんだ。見つけたのは、畳についた血の紙魚しみ。不審に思っ
て床をめくると、掘り起こしたあとがある。そのときは恐ろしく
なって、慌てて仏間に戻ったが……」

彰一兄さんは喋りながら、さらに土を掘り起こしました。今度は

黒い髪が出てきます。

「何が埋まっているかはすぐに察しがついた。だが、何うして霧乃宮邸にこんなものが埋まっているのか、俺は一晩中ずっと考えていたんだ」

死体が埋まっていることをすぐに察したのは、兄さんも同じ経験があるからでしょう。私と玲子姉さんは何も云わず、彰一兄さんの話に聞き入っていました。

「香奈恵から聞いた、死の間際のおふくろの言葉。おふくろは、いったい誰に『謀られた』のか。考えると、それは亮平さんしかない。おふくろの行く末を決めたのも、霧乃宮邸に頻繁に出入りできるのも。亮平さんは、おふくろを看取る代わりに、霧乃宮邸を自らの欲望を満たす場所にした。かどわかした女性を人目につかぬこの家に連れ込み、死体は床下に埋める。もし、こんなことが世間に知れたら……それは、霧乃宮家の体面を重んじ、屋敷を家名の象徴のように思っておふくろには堪えられなかったんだろう」

「でも、それだったらお母ちゃんは誰かに云って呉れば良かったじゃない。そうすれば、亮平さんの所業はすぐに明るみに出たわ私だって、たまには顔を出していたんだし——」

私は云いながら、すぐに自分の発した言葉を後悔しました。何うして母がそうしなかったのか。——彰一兄さんの悲しげな眼差しが向けられます。

「亮平さんは、きっと俺が親父を殺したことを知って居るんだ」

「兄さん！」

いともあっさり云い放った自身の罪状に、私は思わず叫びました。玲子姉さんはめまぐるしく明かされる事実思考についてゆけないのか、呆然と立ち尽くしています。

「これはあくまで俺の想像に過ぎないが、おふくろはずっと亮平さんに脅されていたんだと思う。どうして親父が突然行方不明になったのか、どうしておふくろは、ろくに捜そうとしなかったのか。賢い亮平さんのことだ。ある日、親父は殺されたに違いないことに

気づいたんだろう。そして、それが誰の仕業かも。今さらとはいえ、俺が親父を殺したことは、決してばれてはいけない。おふくろは秘密を守ってもらう代わりに、ずっと屈辱に堪え忍んでいたんじゃないのかな」

「……」

私はどう答えていいのかわからず、押し黙ったままずと手燭を掲げていました。玲子姉さんはわっと泣きながら、真っ暗な廊下をどこかへ駆けてゆきます。

おぞましさと裏腹に、床下に埋もれる死体から目が離れません。暗く、冷たい土の中に埋められて、どれほど苦しかったことでしょう。昨夜、壁一面に現れた女の顔は、死してなお苦悶を訴えていたのです。桜の木の下には、鬼と化した父が居ます。人々の情念が織りなしてきた歴史ある旧家。霧乃宮邸は、いつの間にか妖魔の巣窟となっていました。きっと、母の御霊も屋敷を彷徨っていることでしょう。

そして――

慌ただしい足音ともに戻ってきた玲子姉さんを見て、私は思わずたじろぎました。

振り乱した黒髪。大きく見開き、つり上がった眼。唇には、狂気の笑みを浮かべています。

「姉さん……」

手には鈍色に光る包丁を握りしめ、姉は夜叉の如き形相で立っていました。その顔は、死の間際の母にそっくりです。まるで、母が乗り移ったかのように。

「殺してやる」

ひどくしゃがれた声で、姉さんは云いました。

「こんな呪われた家系なんて、滅んで仕舞えばいい。とち狂った両親と、人殺しの兄貴と夫。頭のおかしい私の娘！ みんな死んでしまええ！」

絶叫にも似た声を発し、玲子姉さんは包丁を振りかざしました。

突然の事態に、私は？然とするばかりです。

「香奈恵、危ない！」

足がすくむ私に、鋭い刃が迫ります。悲鳴を発することも、目を瞑ることもできません。死を覚悟することさえ忘れ、私はただ立ち尽くしていたのです。

しかし、姉さんが握りしめた包丁は、私に届くことはありませんでした。危機を救って呉れたのは、彰一兄さんです。手にしていたスコップを、玲子姉さんに叩きつけたようでした。

鈍い音が響き、時間が止まったように姉さんの動きが止まります。やがて、ゆっくりと崩れ落ちる玲子姉さん。白目を剥いたまま仰向けに倒れた玲子姉さんは額から血を噴き、激しく痙攣していました。口からは、血の泡と奇妙な音を発しています。

「兄さん……」

私はおののきながら、彰一兄さんを見ました。かれは信じられないといった面持ちで、殺して仕舞った玲子姉さんを見下ろしています。由希子ちゃんが、「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣きじゃくりながら、骸にしがみついていたいました。

「終わりにしよう」

ぽつりと彰一兄さんは云いました。

「もう、終わりにしよう。建前に凝り固まった霧乃宮家の体面など、俺はうんざりだ」

かれが、ゆっくりと私を見据えます。その目の奥にある絶望の深さに、私は蛇に睨まれた蛙さながら、身動きひとつできません。今度、私が殺されるのでしょうか。玲子姉さんと同じように、私も頭を割られるのでしょうか。

しかし、彰一兄さんはそうする代わりに、私から手燭をひったくりました。そして、それを障子戸に投げつけます。

「兄さん、何を！」

驚く私の前で、今度は地面に転がる包丁を手にとって自らの首に宛がうと、彰一兄さんは何の躊躇いもなくそれを一閃させました。

噴き上がり、こぼれる血飛沫は、母の吐血と同じ紅椿のよう。私は慌てて彰一兄さんを抱え起こしました。

「兄さん……どうして……」

悲しみと憤りの涙が、？を伝えます。私の手から、彰一兄さんの命が流れてゆきます。

「済まない、香奈恵……玲子を、殺すつもりはなかった……た……」
彰一兄さんは、すでに虫の息でした。

「親父を殺したことを、ずっと後悔してきた——罪を隠して生きてきたところで、凡庸な俺には、霧乃宮家を再興することも叶わない。済まない……最初から、こうする積もりだったんだ……おふくろには——悪いが……霧乃宮は、俺の代で終わらせること……が……」

「兄さん、しっかりしてよ！ 兄さん！」

最期は、霧乃宮家を終わらせることが自分の責任だと云いたかったのでしょうか。彰一兄さんは、泣きながら事切れていました。しかし、私は悲しみに暮れる暇はありませんでした。兄さんが叩きつけた手燭の炎は、すでに手のつけようがないほどに燃え広がっていたのです。私はすぐに決断しました。

「由希子ちゃん、逃げるよ」

泣きじゃくる姪っ子の手を取って、真っ暗な霧乃宮邸を駆け出します。掘り起こした死体も、兄妹の骸も、どうすることもできませんでした。握りしめる由希子ちゃんの手のぬくもりが、ここは地獄ではないことと、私は確かに生きていることを実感させます。何も見えない暗闇。あつという間に充満する煙の中を、迷うことなく玄関に辿り着いたのは、ただ生まれ育った家だったからという理由に他なりません。

逃げた先は、春の嵐が吹き荒れる夜の中でした。？を叩く雨に顔をしかめて振り返ると、屋敷の西側から赤い煙が立ち昇っています。霧乃宮家の、最期です。

凍えるような寒さも忘れて、私は炎に包まれる霧乃宮邸を見てい

ました。母の野辺と同じ、それは確かに霧乃宮家の葬送でありました。屋敷に巣くう亡霊は、これで浄化されるのでしょうか。父の怨念も、兄の悔恨も、姉の狂気も。そして、誰かも知らぬ女の慟哭も。いえ、霧乃宮の家名こそが、亡霊そのものだったのかも知れません。財産も人も失い、とつくに抜け殻でしかなかった霧乃宮家そのものが。すでに命なき、仮初めの名家。そうして、それに執着し続けた母もまた、屋敷の中で鬼と戯れる亡霊だったのでしょう。

——燃えてゆく、

——燃えてゆく。

——ようやく途絶える、霧乃宮の血。追憶の中にある家族の笑顔。確かにあつた栄華も、血の苦しみも煩悶も、すべて灰に帰していきます。

「由希子ちゃん？」

突然、燃えさかる屋敷に向かって走り出す由希子ちゃんを見て、私は驚きの声を上げました。

「どこへ行くの？」

「まだ、お婆ちゃんが中に居るの」

にと笑って、躊躇わず灼熱の炎に入ってゆきます。

「待ちなさい、由希子ちゃん！」

しかし、私の声は届きませんでした。追いかけてましたが、熱風が凄まじく、とても家には近づけません。すでに火の手は、屋敷全体に廻っていました。

「由希子ちゃん……」

母が、由希子ちゃんを呼び寄せたのでしょうか。盲目的に可愛がっていた、ただひとりの孫。

（……まあだ……ここに来ておらん者が……おる——）

死の間際に口にしたあの言葉。あれは、由希子ちゃんのことだったのでしょう。親からもないがしろにされる由希子ちゃんを、きつと母は心残りだったのです。

すべてをこんな運命に導いたのは、霧乃宮紗江子その人だったの

かも知れません。私は悲しみとも安堵ともつかぬ涙を流し、その場に崩れました。慟哭は風音に掻き消され、雨は血と泥を洗い流します。

「どうやら、遅かったようだね」

聞き慣れたいやらしい声を耳にし、私はふと見上げました。激しい雨の中に立っているのは、いつの間に駆けつけたのか、亮平さんでした。黒の洋装に帽子を被り、裏地が真っ赤なマントを羽織っています。

「困るネエ、燃えて仕舞ったとは。大切なものがたくさんあったのに」

そう云って、ジロリと私を見下ろします。私は泣くのも忘れ、恐怖に震えて立ち上がりました。早く逃げたいのに、体が石のように固まったまま動きません。

「香奈恵ちゃん、何か見なかったかい？」

「い……いえ……」

ゼンマイ仕掛けのように、ぎこちなく首を横に振ります。それが、すべてを物語って仕舞ったようでした。

「そうかね。彰一君はともかく、香奈恵ちゃんだけは生かしておく積もりだったのにネ」

亮平さんが、嘲笑めいた声を上げて私に近づきます。これも、母の導いた運命なのでしょうか。霧乃宮一族は、私の死を持って完全に滅亡するのです。

天を焦がす炎の中に、墨染の桜が散ってゆきます。ふわりと現れた白装束の鬼が、私を見て笑ったような気がしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9819q/>

霧乃宮一族の滅亡

2011年11月15日12時23分発行